

**平成 28 年度「海外学校教育実地研究」報告**  
**— イギリス視察 2016 年 9 月 6 日(火)～14 日(水) —**

細戸 一佳・荒巻 恵子・矢野 英明・  
池田 彩乃・小野 貴大・上阪 紘也・齋藤 幸代・  
佐藤 光司・高野 和也・山下 達也・  
木村 さとみ・澤田 隆視・田部井 淳・星野 留美

帝京大学大学院教職研究科

# 「海外学校教育実地研究」開設と実施について

細戸 一佳・荒巻 恵子・矢野 英明

帝京大学大学院教職研究科

## はじめに

本科目開設に向けた動きが始まったのは 2015（平成 27）年 6 月頃である。中田正弘をまとめ役とし、三石初雄、細戸一佳、荒巻恵子をメンバーとするプロジェクトチームが編成され、高橋勝研究科長とともに本科目開設のための検討を重ねてきた。その成果は 2015 年 10 月 19 日付でプロジェクトチーム報告（以下「PT 報告」）としてまとめられた。以下本稿では、「PT 報告」によりながら本科目開設の主旨及び実施までの経緯を確認した上で、今回の実践の振り返りを行う。

## 1 開設・実施の背景

「PT 報告」では、本科目の開設・実施の背景として以下の 3 点が挙げられている。

### 1. 1 本学の「建学の精神」を受けて

本学は建学の精神として国際的視野に立って判断のできる人材育成を掲げており、全学でその実現を目指している。国際的視野に立って物事を考え判断のできる専門性ある教員の養成・育成は本研究科が目指すところである。

### 1. 2 グローバル化に対応した高度専門職業人の養成・育成

今日、学校教育の抱える深刻な教育課題、グローバル化の進展による社会の大きな変動等を背景に、高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員が求められている。

こうした高度専門職業人養成・育成は、学部レベルでの教員養成では難しく、大学院段階での教員養成、つまり教職大学院に期待が寄せられている。

### 1. 3 本研究科のコース及びカリキュラムと新たな特色づくり

本研究科のコース（スクール・リーダー、教育実践高度化コース）は、「広い視野で理論と実践を融合する」ことが特色の一つとして挙げられる。そのため、例えば、共通基礎科目「創意ある教育課程の作成と評価」では、海外の学校の教育課程の検討を学習内容として含み、また高度化専門科目には「グローバル化と国際教育」が開設されている。こうした取り組みをふまえて、実際に海外の学校教育を訪問調査し、実学を通して学ぶカリキュラムとして位置付ける必要があると考えた。

またこのことは、本学教職大学院の新たな特色として打ち出せるものと考えた。

これらを背景として本科目の実施目的が設定され、さらにそれに基づいて候補地・宿泊施設、実施時期、参加人数及び授業担当者、授業科目への位置付けとシラバスの内容等について検討を重ねられた。シラバスについてはすでに公開されているので、その他の項目について実施までの経緯を確認することとする。

## 2 実施までの経緯

まず候補地・宿泊施設について、本学が有する在外施設を利用することとした。これには授業参加者の経済的負担を軽減する意味も含まれている。また、教員養成及び学校教育についての資料入手及び学校訪問調査が可能であることを条件として検討した。その結果、訪問国をイギリスとし、宿泊施設として帝京ロンドン学園及び帝京大学ダラム分校の施設を利用させていただくこととした。訪問する学校についても、帝京ロンドン学園のあるロンドン及び帝京大学ダラム分校のあるダラム近辺の学校を訪問する

こととした。

次に実施時期について、イギリスの学校の年度始めが9月からで、本学夏季休暇期間の7・8月は先方も休暇期間中であること、また本学の秋学期開始が9月2週であることを考慮し、9月6日(火)から9月14日(水)までの7泊9日の期間を設定した。なお、本期間設定時点ではまだ翌年度の学事日程が決定していなかったため前年度実績を基に本学秋学期開始日を想定したのであるが、実際の授業開始日は想定した日程より早くなっており、結果として本授業の実施時期と秋学期授業とが重なることとなった。

参加人数について、できるだけ多くの学生に参加してもらいたいとの思いがある一方、受け入れ先の学校の都合や、宿泊施設・送迎バスの利用可能人数等に制限があることから、学生参加者を15名程度までとした。上限を越えた希望があった場合、まずはスクール・リーダーコースの学生を優先し、さらに空きがある場合には教育実践高度化コースの学生のうち最上級生を優先することとした。最終的にはスクール・リーダーコースの学生4名、教育実践高度化コースの学生7名の合計11名の参加となった。

授業担当者について、他の教職大学院の授業と同様に教員2名が担当することとした。ただし毎年同じ教員が担当することになると担当教員の負担がかなり大きくなるため、年度によって交代することとした。担当教員の決定方法については今後の検討課題とすることとし、さし当り第1回目についてはPTのメンバーから選出することとなった。結果、細戸一佳と荒巻恵子が担当することとなった。これに加えて任意参加者として矢野英明も同行した。

授業科目への位置付けについて、選択科目として、高度化専門科目群の「発展的領域」区分の「総合的・横断的な教育課題に関する科目」領域の科目として位置付けられることとなった。

### 3 平成28年度実施の振り返り

#### 3.1 旅程の概要

参加学生の学びの成果は後の報告に譲ることとして、ここでは教員による報告から振り返る。

表1 平成28年度の旅程表

9/6 (火)	羽田発→ヒースロー着 (ロンドン泊)
9/7 (水)	ロンドン日本人学校訪問 (ロンドン泊)
9/8 (木)	St. Peter's Church of England Primary School 訪問 (ロンドン泊)
9/9 (金)	Burnham Grammar School 訪問 (ロンドン泊)
9/10 (土)	ロンドン社会教育施設視察→ダラム (ダラム泊)
9/11 (日)	ダラム社会教育施設視察 (ダラム泊)
9/12 (月)	St. Michael's RC Primary School, Durham School, Durham High School for Girls, Durham Johnston Comprehensive School 訪問 (ダラム泊)
9/13 (火)	ニューカッスル発→ヒースロー経由→羽田
9/14 (水)	羽田着

28年度本科目の旅程は表1のとおりである。ロンドンでは1日1校で3日間、全員で同じ学校を訪問した。比較的時間に余裕があり、訪問後のリフレクションも十分に行うことができた。他方ダラムでは9月12日の1日のみ、2グループに分かれたうえで、各グループが2校ずつ訪問する形をとった。それぞれ訪問した学校が違うため各々の学校の紹介が必要となり、リフレクションに十分な時間を割くことができなかった。次年度以降の日程に関しては検討が必要である。

参加者に関して、人数は15名程度でよいが、参加者の選別については検討を要するものと思われる。今年度は採用試験対策や課題研究の中間発表会準備等、他の予定との調整が困難で事前事後指導の時間が十分に確保できなかった。受講者募集にあたってはこうした事情を十分に周知した上で行う必要があるだろう。

#### 3.2 荒巻報告から

平成28年度は教員3名による引率の下で11名の履修者によるイギリスの学校教育訪問調査を行った。本科目の目的は、海外の初等・中等教育学校の

訪問調査を通じて、我が国の教育との比較によって授業方法や教育課程の編成を中心とした我が国の今後の学校教育の在り方について考察するとともに、その成果を各自の教育課題研究や授業実践に活かすことであった。イギリスの本学グループの帝京ロンドン学園、帝京大学ダラム分校の学校施設や情報リソースを活用し、現地の学生寮での実際の生活を体験できたことも学生にとっては新鮮であったようである。

授業の内容としては、事前に学生たちは、英国の今日の海外教育制度と学校教育事情を学習し、レポートを課せられた。さらに学生たちは学校ホームページなどから事前調査を行い、問いを立て、訪問調査の方法を検討した。

訪問調査で学生たちは、事前に課題提起した内容を明らかにするための調査を行うと同時に、イギリスの教師や学生たちとの相互交流により教育実践や教師文化に関する課題を深めていた。さらに寄宿舎で訪問調査日の夜、リフレクションを行ったことにより学生間で協議することができた。具体的には調査対象の学校報告と協議会の司会進行を、スクール・リーダーコースの現職教員と教育実践高度化コースの学生がペアで行い、全体で振り返った。このリフレクションによって、イギリス教育の実際から、日本の教育実践の特徴と課題を検討できていたように考える。

訪問調査をまとめた報告会を、帰国後の 9 月 28 日教職研究科教員及び全院生の前で行った。

本授業を通して、国際理解教育における異文化理解、多文化共生に関する基礎的理解の習得が図れたと考える。また、本授業をきっかけとして国際化への関心と広い視野により国際理解教育の授業づくりや教材研究が深まることを期待している。

### 3. 3 矢野報告から

これまでオランダやベルギー、フィンランドなどの学校視察を経験してきた。国によって多少の違いはあるものの、どの国も子どもの「学習」を大事にしている印象を受けた。特にフィンランドは、小さな国ということもあるのだろうが、責任ある社会人

を育てるという教育目標を明確にしていることが至るところで感じられた。

今回もイギリスの学校を視察できるということで参加し、いろいろなことを考えさせられた。イギリスで特に考えさせられたのは、教育はその国の文化や歴史、風土を基盤にして進められているということである。日本ではあまり例を見ない寄宿舎生活をしながら学ぶ進学校などはイギリスの伝統なのだった。また、キリスト教という宗教を大切にした公立学校も日本にはないものだった。

学生時代に教育を考える視野を広げるという意味で、こうした海外研修はとても有意義だと思う。学校を視察することだけでも意義はあると思うが、先生方との交流の機会もあればいいと思う。また、教師教育という視点から大学の教員養成についても学べる機会があれば、さらに意味のあるものになると思う。

私自身、海外の学校視察をする意味は、海外の教育から学びたいということよりも、海外の学校の様子や教師の教育に対する考え方を知ること、日本の教育を見直す機会にしたい。日本の教育は日本の風土と文化、歴史を基盤に考えることが必要だと思う。

教育改革が進められている今日、海外の教育ばかりに目を向けるのではなく、日本の教育の足元をしっかりと見つめ、私たちの先輩方の知恵をもう一度見直すことも必要だと考える。海外で教育を見ることが、日本の教育を見直すよい機会になればいいと思う。

## 4 おわりに

今回が第 1 回目ということもあり、手探りで物事を進めていく状態であったが、周囲の皆様のご協力のもと無事研修旅行を終えることができた。特に魚山秀介先生とイングラムめぐみ氏をはじめとする帝京ロンドン学園の皆様、今関雅夫先生や今井茂人氏をはじめとする帝京大学ダラム分校の皆様には宿泊施設や訪問学校、通訳の手配等に多大なるご尽力を賜った。ここに感謝の意を表する。



## 【イギリスの学校制度と教育課程】

澤田 隆視 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

### イギリスの学校制度

イギリスはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの連合王国であるので、ここではイングランドを中心にとりあげる。面積は約24.3万km<sup>2</sup>で日本の約3分の2、人口は約6,300万人で日本の約2分の1の国である。また学校制度においては、帝京大学教職大学院が初等教育と中等教育の教員を養成していることから、初等学校と中等学校について以下に述べる。

義務教育は5歳から16歳の11年間である。5歳から11歳対象の初等教育は初等学校(プライマリースクール)、11歳から16歳の中等教育は中等学校(セカンダリースクール)と呼ばれている。

初等教育は、通常6年制の初等学校で行われ、5歳から7歳の幼児部(2年間)と7歳から11歳の下級部(4年間)に区別される。併設されるのが一般的だが別々のこともある。

一部では、幼児部と下級部に代えて、ファーストスクール(5～8歳, 5～9歳など)及びミドルスクール(8～12歳, 9～13歳など)が設置されている。



← 訪問したロンドンの St Peter's C of E Primary School 保育学級併設の初等学校(日本だと幼稚園併設の公立小学校)。

中等学校(セカンダリースクール)は11歳から16歳までで、9割の生徒が無選抜の総合制学校(コンプリヘンシブスクール)に通うが、選抜制のグラマースクールやモダンスクールのある地域もある。

グラマースクールは、公立中等学校の一形態であり、イングランド及び北アイルランドの一部地域で

行われている11歳児対象の試験(イレブンプラス)で高得点を獲得した子供たちが選抜される。現在、イングランドに約3,000校あるセカンダリースクールのうち、グラマースクールはわずか163校である。

2016年9月9日に、メイ首相が約20年ぶりにグラマースクールを拡充する方針を発表したが、「選抜制入学は低所得者層に不利」として、教育格差拡大を懸念する声も上がっている。



↑ 訪問したロンドンの Burnham Grammar School は、選抜制の公立中等学校である(日本だと国公立の中高一貫校)。

イギリスは公立学校でも教員採用が学校ごとに行われているので、校長の裁量権が大きい。

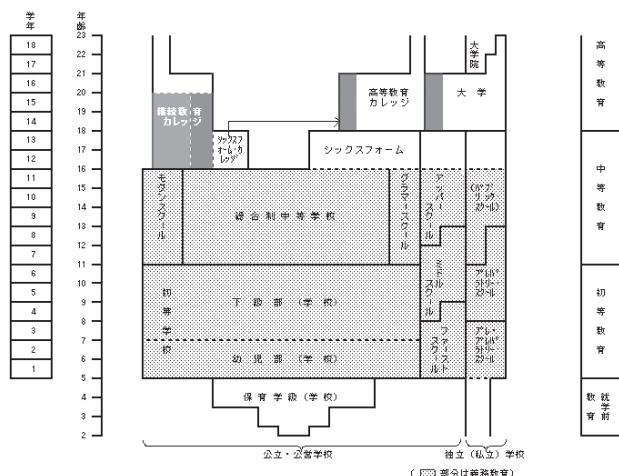
私立学校は独立学校とも呼ばれ、初等教育がプレパトリスクール、中等教育がパブリックスクールと呼ばれる。パブリックスクールは長い歴史があり、入学基準が厳しく、全寮制で学費も高い。

イギリスの学校制度は複雑ではあるが、学校ごとの特色が出やすいとも言える。しかしそのことは、階級格差の解消が掲げられても、いまだに残っていることも理由の一つである。

今回の研修では、経済を含めた地域格差の大きさも感じる事ができた。訪問した学校によって児童生徒の人種割合に違いが見られたからである。このことは「親に学校の選択権」があることにより、学校間の格差が広がりやすい要因になっているように思われる。

ヨーロッパ連合(EU)からの離脱を問う国民投

票の結果を見て、イングランドとスコットランドが別の国であることは、以前からの認識通りであったが、イングランド内でも投票結果の違いがみられたことにもつながっているような気がする。



文部科学省ホームページ「イギリスの学校系統図」

## イギリスの教育課程

日本の学習指導要領にあたるものが、国の義務教育段階の教育課程の基準(ナショナルカリキュラム)であり、法的拘束力がある。日本のように学年ごとではなく、2～3 学年単位のキーステージごとに規定されている。英語、数学、理科が3つのコア教科に位置付けられていて、歴史、地理、テクノロジー、音楽、美術、体育、外国語が7つの基礎教科に位置付けられている。道徳・市民教育として、必修のシチズンシップ科や、学校裁量の PSHE (人格的社会的健康教育) も行われている。

ナショナルカリキュラムには、各教科の習熟の程度を表す到達目標と到達目標に沿った指導内容を表す学習プログラムが示されている。しかし学習プログラムは、具体的な教授方法などは示しておらず、大枠を決めているだけである。また各教科の配当時間も示していないので、各学校に任されている。

日本の学習指導要領と比べると細かくは無く、教育課程に関する学校の裁量権は大きい。また学年が上がるごとに選択科目の幅が広がるのが特徴である。

教科書もあるが学校に置かれており、授業によ

ては参考書のような使われ方をしていた。教科書検定は無い自由発行で、日本の学習指導要領と教科書の関係とは異なる。授業での教科書使用義務もない。

義務教育は5歳からで、学年表記は Year1 から昇順である。ナショナルカリキュラムの単位になっているキーステージは、5歳から7歳のキーステージ1、7歳から11歳のキーステージ2、11歳から14歳のキーステージ3、14歳から16歳のキーステージ4の4つに分かれている。児童生徒は7歳、11歳、14歳でキーステージテストを受ける。

日本では、義務教育修了を証明するのは中学校の卒業証書ということになるが、イギリスでは、GCSE (General Certificate of Secondary Education) という中等教育総合資格試験である。キーステージ4のテストとも言える。成績はA～Gのグレードで評価される。そして大学進学希望者は、中等学校に設置されているシックスフォームと呼ばれる課程か、独立の学校として設置されているシックスフォーム・カレッジに進学する。これは義務教育後の中等教育の課程・機関で、高等教育進学準備教育課程で、中等学校からの進学率は7割である。

## 【参考資料】

外務省ホームページ

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/uk\\_2014.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/uk_2014.html)

文部科学省ホームページ

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryo/08102203/001/016/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryo/08102203/001/016/002.htm)

大津尚志

「英仏独日の教育課程基準と教科書に関する研究」『武蔵川女子大学大学院 教育学研究論集』第4号 2009 pp.1-8

UK NEWS-pick up15 (September 2016 vol.1467)

<http://www.news-digest.co.uk/news/news/pick-up/15550-1467.html>

## 【ロンドン日本人学校 (The Japanese School in London)】

### イギリスで行う日本の教育

上阪 紘也 (教育実践高度化コース2年)

#### 1 学校基本情報

学校名：ロンドン日本人学校 (The Japanese School in London)

所在地：87 CREFFIELD ROAD, ACTON, LONDON, W3 9PU, U.K.

校長名：根路 銘 敢

開校年：1976年

児童生徒数：小学部 (6～12歳) 中学部 (12～16歳)  
合計 380名 (2016年9月現在)

学級数：16学級 (小学部11学級、中学部5学級)

教職員数とその内訳：35名 (文部科学省からの派遣教員に加え、数名の現地採用教員が勤務している。英語・英会話講師として外国人職員が5名勤務している。)

特色：文部科学省認定の在外教育施設であると共に、英国教育技能省認定の私立学校である。

日課：小学部1年～中学部3年まで、週5日6時間で構成されている。

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 学校説明

ロンドンの日本クラブ運営の「日本人学校有限会社」により「全日制の義務教育学校」として設立され、今年で40周年である。

日本国政府からの補助金と、在校生から徴収する入学金・授業料により運営されている。

教科書は、日本で検定を受けた「教科用図書」を使用し、学習指導要領に準拠した教育課程によりカリキュラムを定めている。

##### (2) 施設の様子

1900年にハバーダッシャーアスクス・スクールの女学校として建てられた建物を30年前に買い取り、ロンドン市内より移転した。100年を超える歴

史をもつ総レンガ造り一部三階建ての重厚なたたずまいの建物である。周辺の環境との調和を考えながら、日本の教育内容に適応するように増改築を行い現在の形となっている。開校40周年を記念してグラウンドは全天候型グラウンドに改修された。屋内体育館には日本から取り寄せた跳び箱などが用意されている。図書館には日本の蔵書が多くそろえられており、総数は約25,000冊である。

普通教室は日本の学校に比べるとやや狭く感じられた。設置されている机や椅子は英国の仕様である。古い黒板の使用も見られた。

英会話の授業などを行う英語教室が7部屋あり、全ての部屋に電子黒板とホワイトボードが設置されているが、黒板の設置は無い。

##### (3) 年間行事・日課

日本と同様に4月を年度初めとしている。教職員の派遣の関係などから始業式、入学式が日本よりも1週間程度遅く設定している。運動会は小中学部合同で行っている。小学部6年、中学部2年では修学旅行、小学部5年では自然体験教室として宿泊学習を実施している。近年日本では実施する学校が少なくなってきた写生大会を全校で行っており、当日はロンドン市内の公園などに出向き作品を描く。また、9月には文化祭を行い学部・学年別に発表をする。様々な事態を想定した避難訓練を年間4回行う。

イギリスの夏季と冬季の日照時間の違いに合わせて夏季と冬季二つの時程を用意している。授業時間は日本と同様、小学部45分、中学部50分である。昼食時間や下校時間を揃えるため休み時間で調整を行っている。また、小学部低学年は授業時数が少なく休み時間の調整だけでは揃えられないため「play」の時間を設けて調整している。

##### (4) 授業の様子

中学部1年、小学部6年、小学部1年の2校時の



授業を順に参観させていただいた。内容や児童生徒の様子について以下にそれぞれまとめる。

#### ①中学部 1 年 生徒数 36 名

～社会科 地理分野 世界の諸地域～

地理分野の学習で世界の諸地域、特に中国を取り上げた授業内容であった。学期の始めということで既習内容の確認を行っていた。その発言の中に「私は習っていないから…」という生徒がいた。授業後の説明では、発言をした生徒は転入をしてきたばかりの生徒であることがわかった。2 学期が始まるにあたり全校で 61 名の転入があったとのことであった。転入生にはまわりの生徒が手助けをするなど生徒同士の関係がみられた。

#### ②小学部 6 年 児童数 36 名

～算数 比～

算数の比の計算を扱う授業であった。教科書に記載された身近なものなどを題材にした練習問題を使い指導していた。一人ひとりが問題にしっかりと取り組んでいる様子であった。また、個人で問題を解いた後には自分の考えを友達に伝える時間を設けてより理解を深められるような指導をしていた。

#### ③小学部 1 年

～英語（英会話）～

ロンドン日本人学校では小学部では週 3 時間、中学部では通常の英語の時間のほかに週 2 時間の英語（英会話）の授業を設定している。それぞれ英語学習の経験年数や習得状況に応じてクラス分けを行い、指導をしている。英語教室は 7 部屋用意されておりそれぞれの教室に担当の教員がいる。学年や段階によってはチームティーチング（TT）の形をとって指導を行っている。

今回の訪問では小学部 1 年生の授業を参観した。1 年生 2 クラスの児童が 5 つの教室に分かれて授業を受けていた。すべての教室に電子黒板が設置され、どの授業でも活用していた。

英語初心者のクラスでは児童 7 名に対して日本語も話すことができる外国人講師 2 名の TT で指導を行っていた。イラストや写真を豊富に活用しながらアルファベットや単語の発音や意味を、日本語を交えながら指導していた。

中級者のクラスは児童 5 名に対し外国人講師 1 名で指導を行っていた。見学は授業時間の終盤であったこともあり、学習の振り返りの活動場面であった。ゲームの要素を取り入れた活動で児童は積極的に挙手をして答えていた。このクラスで教師は、日本語を一切話さず英語のみで指導をしており、児童も内容を理解して活動をしていた。ただ、児童同士の会話では、日本語を交えての会話が多かった。

上級者のクラスは児童 12 名に対して外国人講師 1 名で指導を行っていた。天気の良いイメージごとに思い浮かぶワードを挙げていくという活動で児童は近くの友達と話しながら学習を進めていた教師は机間指導を行いながら、児童の書き出したワードについて英語で指導をしていた。このクラスでの指導も中級者のクラス同様に英語のみで指導をしていた。活動の際の児童同士の会話についてもほとんど英語で話しており児童の英語経験の豊富さを感じた。

#### ④参観全体を通して

学年・教科の異なる 3 つの授業を参観させていただき一番実感したことは、“日本と同じ”ということであった。教室の環境はもちろん児童生徒の姿や指導の方法などほとんど日本との違いを感じなかった。日本に帰った時に子供たちが困らないようにという考え方の大きなあらわれである。また、イギリスならではの部分では英会話の指導の充実を目の当たりにすることができた。



▲ロンドン日本人学校正門前にて校長先生とともに



## 【ロンドン日本人学校 (The Japanese School in London)】

### 日本人学校の担う役割

星野 留美 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

日本人学校とは、海外に在住する日本人の子ども(以下、海外子女)が通学することができる在外教育施設のひとつである。日本国内の小・中学校と同等の教育を行う目的で設置された全日制の学校で、文部科学大臣が認定した学校のことを言う。世界50カ国・地域に89校設置(平成26年)、小学部中学部合わせて約2万人(平成28年)が学んでいる。

阿南(2015)は、日本人学校に通う海外子女は、その総数のうちおよそ3分の1を占めており、日本人学校が海外子女教育の中心を担っていると述べている。また、海外子女の数は増加し続けており、それに対応した教育の保障と、日本国内の教育との継続性を維持するという点においても、日本人学校には重要な役割があると指摘している。

ロンドン日本人学校に在籍する児童生徒も、いずれ日本に帰国するため、日本の教育を継続すること、帰国した際に学習面で困らないこと、日本語力を落とさないことに重点を置いている。

見学・質疑を通してわかったロンドン日本人学校の特徴として以下の三点を挙げる。

まず、日本とイギリスの両国の認定を受けた教育施設であるということが挙げられる。日本の学習指導要領に準拠しつつ、イギリスの法令にも則っており、査察もあるという。日本の教科書を使用した授業が大部分を占めるが、文部科学省の定める教育課程特例校と同等に、総合的な学習の時間を英会話に置き換えるほか、ロンドンならではの特色ある活動(現地理解教育、現地校交流等)も取り入れている。

二点目は、日本とは学習環境が大きく違うということである。自然環境では、四季があるという点で日本と同様であるが、バラが一年に3度咲くなど、日本と異なる部分もある。生活科や理科の学習内容では、現地で実際に体験することが難しい事象もあるだろう。社会科では、イギリスにしながら日本の地理を学習する。校庭には現地校にはないトラックや鉄棒を設置し、日本から跳び箱を持ってくると、

イギリスにしながら日本と同様の教育を保障するための配慮がされている。

三点目に、学校の構成が日本国内の学校とは異なる。ロンドン日本人学校の教員は、文部科学省からの派遣教員と現地採用職員、英会話を担当する現地採用講師(イギリス人)がいる。文部科学省からの派遣教員は2～3年という早い任期であり、指導や学校運営の継続性を考えると厳しい面もある。さらには、児童生徒の転出入も年間を通じて多い上に、その実態は幅広く、国内では考えにくい状況がある。

この三点については、阿南(2015)も同様に注目しており、ロンドンに限らず日本人学校共通の特徴であると述べている。良い面と難しい面の両面を持ち合わせているため、帰国後考えた指導と、国外ならではの教育のバランスが求められる。

鹿野(2012)は、海外から帰国した子女については、時代の変化とともに、日本文化への再同化を強要されるような存在から、国際化の社会でこそ能力を発揮できる特別な存在になりつつあると指摘する。さらに、国を超えて学ぶ場が変わることによる不利益や、心理的側面についても注目していく必要があると強調している。

これだけグローバル化が進む中でも、やはり帰国時に困らないようにと考えざるを得ない背景には、日本の進学システムも関係しているのではないだろうか。さまざまな側面で、子どもにとっての最良が考慮されることを願ってやまない。

### 【参考文献】

- 阿南 清士朗 (2015)「日本人学校の現状と学校経営課題の一考察—事例校調査を通して—」『九州大学教育経営学研究紀』(17) pp.51-60
- 鹿野 緑 (2012)「海外・帰国子女研究の文献分析—研究方法論の志向を探って—」『南山大学国際教育センター紀要』(13) pp.1-16

## 【St. Peter's Church of England Primary School】

### 幼稚園から小学校への接続を重視した学校

高野 和也（帝京大学大学院教職研究科 教職実践高度化コース）

#### 1 学校基本情報

学校名：St. Peter's Church of England Primary School  
所在地：Minniecroft Road, Burnham, Buckinghamshire,  
SL1 7DE  
校長名：Lesley Blount  
開校年：1962 年  
経営方針・教育目標：Every child a success  
児童生徒数：265 名（2～11 歳）  
学級数：6 学級  
教職員数とその内訳：教員 12 名 スタッフ 36 名  
特色：幼稚園から小学校への接続の重視  
日課：午前中に国語・算数・科学の授業。午後幅広い教科（体育・美術）

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 学校説明

1962 年に教会を母体として作られた公立学校である。学校選択制が設けられ、保護者はエリアの中から 4 つの学校を選択し、振り分けられることとなる。教会に行き礼拝をおこなう時間もある。家族やコミュニティを大切にし、思いやりや発見する喜びを育むことで成功できる子を育成することをモットーとしている。この価値観は保護者もよく理解している。小学校の敷地内に幼稚園と保育園があり、学園内で年少者を見る機会も多くある。教会の色である「紫」をスクールカラーとし、多くの場所・場面で「紫」が使われている。

PSHE（Physical Social and Health Education）の教育を推進している。週一回程度、市販されている PSHE のガイドラインから学習内容を設定し授業を行っている。どのように達成するかは子ども次第であり、変化したら新しいことを始めている。教師はそれぞれの項目で子どものベストを出すためにはどのようにするか考え、子ども自身もベストを尽くすためにはどのようにすればいいか考えながら行っている。目指すべきものの一つとして礼儀正しく喧嘩

にならないように自分の意見言えるようにするというものがある。

幼稚園から小学校への接続に力を入れている。Little Fishes（2～3）、Rainbow Fish（3～4）という場所があり、学習を進めている。前者は日本という保育園、後者は日本でいう幼稚園の活動を行っている。また、4 歳～小学校入学準備クラスのレセプションと呼ぶクラスがある。この場所では、自分でやりたいことを一日行い、片づけまで行えるようにする。この学習を通して PSHE の学習を低年齢期から行うことができるようにしていた。カーペットタイム（カーペットの上で活動をする）やシッティングタイム（椅子に座り活動をする）を活用し、自由に活動できていた就学前教育の場から小学校で一日座っての学習ができるようにするためにおこなわれているところである。

##### (2) 施設の様子

校舎は平屋建てで、広い敷地の奥まで広がっていた。奥に行くごとに学年が下がって行く。校内の設えは、紫のスクールカラーで彩られていた。ICT 環境については 32 台の iPad と 32 台のデスクトップ PC を所有。個人で調べ学習ができるようになっている。

広大なグラウンドを所有している。グラウンドは全面芝生が敷かれている。日本の学校の校庭にある「鉄棒」はイギリスには存在しない。

各教室にモニターがあり学習確認ソフトによって確認されている。児童一人ひとりに ID が与えられている。そこをタップすると成績をつけることができる。善い行い・悪い行いなど学習態度など児童の学校でも様子を携帯端末で確認することが出来る。

##### (3) 授業の様子

今回報告者が 1 時間観察した授業は、レセプションのクラスと Year3 の学級活動である。他学年の

授業内容については、私が短い時間観察したものに加え、他観察者の情報を共有し載せたものである。

レセプションのクラスは、幼稚園から小学校への移行を円滑に進めるために設けられている。子どもたちの自由度を重視した活動として、子どもたちがやりたいことをしていた。一方で、時間になったら片づけをし、先生の話聞くということを行っていた。夏休み明けということもあり、教師が子ども一人ひとり夏休み何をしていたのかを細かく聞いていた。教師と子どもの信頼関係を築くのに時間がかかり、適応できず大変になることもある。それを避けるために行っていた。

Year1の体育の授業では、グラウンドで体づくり運動を行っていた。子ども自身で扱うことが出来るボールの大きさを決めていた。大きいボールや小さいボール、ラグビーボールといったように様々な形のものを使用していた。自分自身で扱うことが出来る大きさを見極め扱うことが出来るようになることが本授業のねらいであるのではないかと。自分で扱うことが出来ない大きさを選んでいる子どももいたが、積極的に活動をしていた。

Year2の算数の授業では、ブロックを使って学習を行っていた。日本の算数科でも使用するブロックを教材として指導していた。できる子・できない子の差が大きく授業を行うのが大変そうであった。

Year3の学級活動では、新学年が始まったということもありレクリエーションを行っていた。教師が子どもの名前を当てたり、子ども同士で誰が当ててくれたのか考えたりするゲームをしていた。その後、良い友達とは？ということホワイトボードに記入し全員で共有していた。新学期に学級の友達と仲良くなるための手段として日本の小学校でも活用することが出来る。

Year4の学級活動では、1歳～10歳までの生い立ちの学習を行っていた。日本で行っている「1/2成人式」と同じような学習であった。この授業では、音楽を流すことで行っていた。授業中に音楽が流れることに子どもたちに抵抗はなく、普段から行われている活動である。

Year5の算数の授業では、文章題4人のグループ

で取り組んでいた。机上での話し合いだけではなく、カーペットに移動をしてモノを動かしながら話し合いを行っていた。班活動で行うことは日本でも行われることだが、カーペットのある所に移動して授業を受けるということは少ない。

Year6の授業では、1666年に起こったロンドン大火について、リーフレットを作る学習であった。映像資料を用いて学習を進めていた。支援の必要な子どもに対してはマンツーマンで支援を行い、学習に遅れが出ないように配慮していた。学級にはBLOBツリーというのがあり、自分はどのような学習者であるかというものを視覚的にわかりやすいようにまとめてあった。またどのような学習過程を経てYear6になってきたのかというも掲示物が貼ってあった。

どの学年でも授業者と支援者の複数体制で行われていた。授業中に分からないことがあり行き詰ってしまっている子どもや気持ちが抑えられなかった子どもに対して声を掛け合い、これからの活動を考えさせていた。授業者が子どもの行動を決めるのではなく、子ども自身がこれからどのようにしたいのか考える時間を設け決めさせていた。教師が複数名いるからこそ、授業を止めることなく行うことができるのだろう。

#### (4) その他

##### ・食育に関すること

イギリスでは肥満が社会的な問題となっている。改善するために、低年齢期から食事に気をつけるように指導が進められてきた。府からHealthy School(健康への意識の高い学校)と認定されており、低糖・低脂肪の食材を使用し給食を提供していた。





## 【St. Peter's Church of England Primary School】

### 子ども一人一人の力を引き出す取組

木村 さとみ（帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース）

管理職の学校説明では、「知・徳・体をバランスよく育てようとしている」「校外での体験学習を大切にしている」「地域とのつながりを大切にしている」などといった内容があり、日本での教育と共通している部分が多い。しかし、カリキュラムに関しては、各学校に任されている部分が大きいという点で違いがあった。ナショナルカリキュラムがあるものの、何をどう教えるかは自由である。さらに、学校裁量でニーズに応じて導入されるローカルカリキュラム（「子どものための哲学」「思考スキル」など）もある。何をどう教えるか、どんな教材を使用するかといったことは、学校や各教師に任されており、校長のマネジメント力や教師の指導力がより一層求められる。

6年生の授業では、歴史と英語を組み合わせた、考える力やリサーチ力を高めるための授業を参観した。児童は2年生の時に学習した350年前のロンドン大火について、資料から必要な情報を抜き出し、リーフレットを作成するという活動をしていた。担任の先生は「セカンダリースクールでもやっていけるように、学ぶ能力を育てたい」「考え、人の意見を聞き、アイデアを共有していく」「困難を乗り越える力にもつながる」ということを参観者の私たちに熱く語ってくださった。児童の机はグループ机になっており、レベル別に着席している。そのレベルによって教師やアシスタントの支援が異なり、一人一人が課題に向き合えるように工夫されている様子だった。授業の最後に、児童が教室内を歩いて今日書いたものを見合い、お互いの良さを認め合っていた。授業を通して、課題に真剣に向き合う子どもの姿や、互いを認め合う温かな雰囲気、それを引き出す担任の先生の揺るぎない自信のようなものが印象的であった。

6年生の教室の後方に、大きな掲示物があった。興味深く見ていると、「BLOB TREE」というもので、PSHE の取組の1つとして、子どもたちに書かせた

ものだと説明してくださった。自分を見直し、自己価値を上げることために取り組んでいるそうだ。メタ認知能力や自己肯定感を育むことにつながるのだろう。

BLOB TREE は Pip Wilson によって開発されたアクティビティで、学習者が自分自身について考え、表出したり、それを基に互いにサポートする方法を考えたりすることができる。

- ・自分はどんな学習者か、絵の中から一人選んで色を塗り、その理由を記述する。
- ・自分に親近感のある人を絵の中から二人選び、色を塗る。
- ・自分が成功していると感じる時について記述する。
- ・もっと自信を付けて自立するために何ができるかを考えて記述する。

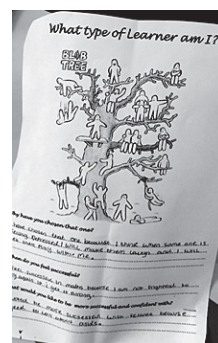


図1 BLOB TREE

「BLOB TREE」は PSHE の取組のほんの一端に過ぎないが、自分を客観的に捉え、将来を見通す力を育てるという意味で、PSHE の目的である「自分の才能を最大限に生かす選択ができるようになること」「能動的市民として積極的な役割を担うための準備をすること」「人々の間における違いを尊重することができるようになること」などにおいて、重要な役割があると感じた。

自分について知り、将来の生き方を考えることは日本の教育でも行っているが、メタ認知能力や自己肯定感の低さを感じる場面が多くある。この機会に、それらの視点から実践を振り返り、来年度以降の実践につなげていきたいと感じた。



## 【Burnham Grammar School】

### Embracing Challenge

齊藤 幸代 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 学校基本情報

学校名：Burnham Grammar School

所在地：Burnham Grammar School, Hogfair Lane,  
Burnham, Bucks, SL1 7HG

校長名：Andy Gillespie

開校年：2011年

経営方針・教育理念：

活動的な一市民である子ども。

自身の未来構想ができる子ども。

幸せ、そして健康・安全である子ども。

自分を持っている子ども。

自分のことに責任を持つ学習者である子ども。

児童生徒数：1040名 (8～18歳)

学級数：form group (縦割り学級) が40クラス

教職員数とその内訳：約100名

各教科の担当教員とスタッフ。

スタッフには、受付、遠足 (年90回実施) 支援、  
技術科目担当、図書館司書、子どもの安全担当、  
外国語科目担当をするネイティブ講師が含まれる。

特色：理系科目に特化した授業構成になっている。

児童生徒一人ひとりに合わせた学習にも力を入れており、信号機の色を用いて学習状況を教員間で共有している。(学習内容の定着度を赤・黄・青で表す) 時には、Internetの学習サイトや本を薦めたり、ランチタイムに先生や先輩が直接、個別指導に当たることもある。

また、移民が多く住む地区に位置するため、児童生徒が信仰する宗教も様々である。

11:10～11:30	軽食休憩
11:35～12:35	3限授業
12:40～13:40	4限授業
13:40～14:25	昼食休憩
14:30～15:30	5限授業
	自習 (希望者のみ)
	下校

表2：Sixth form (year12,13) の場合

8:30～	登校 各自授業の教室へ登校する
9:00～10:00	1限授業
10:05～11:05	2限授業
11:10～11:30	軽食休憩
11:35～12:35	3限授業
12:40～13:40	4限授業
13:40～14:25	昼食休憩
14:30～15:30	5限授業
	自習
	下校

Sixth formの生徒は、日本の大学のように時間割を各自で作成する。空いた授業時間は自習時間に当てている。

#### 日課 (例)

表1：year7～11の場合

8:30	登校 form group (縦割りのホーム ルームクラス) で出欠確認
9:00～10:00	1限授業
10:05～11:05	2限授業



写真1：校舎入口の様子

## 2 訪問調査の記録

### (1) 授業内容

学年を問わず全授業が、教科担任制で行われている。授業時間は 90 分である。校舎内に各教科のブースがあり、授業毎に生徒は教室を移動する。10 分ほどの休み時間の間に全生徒が移動するため、校舎内は大混雑となる。Sixth form の授業は選択制のため、どの授業も 20 人以下で行われる。Year7～11 は 20 人強と、少し人数が多くなる。

授業スタイルは、学校の中で決められた型はない。「生徒の学びのために良いものは何でも取り入れていくように。」と校長先生は普段から全教員に言っているとのことであった。生徒は、「机を教室の脇に並べ、円になって行う授業や、学習内容のリサーチを生徒に多く行わせるという授業スタイルが面白くて好きだ。」と、話していた。だが、生徒全員が黒板の方を向き、教師が説明を行うという日本でもよく見られるスタイルが、主流であるようだ。

また、多くの授業で“success criteria”が授業の始めに提示され、学習の達成目標を全生徒に周知させていた。特に Sixth form の生徒は、A level（日本でいうセンター試験のようなもの）を受ける際の解答規準を知るという面で、この“success criteria”が重要な役割を果たしているようである。



写真 2：Sociology（社会心理学）の教室



写真 3：教育目標も掲示されている（校舎内廊下）

参観した授業は以下の 3 クラスである。

#### Year13 Biology

生徒：男子 6 人、女子 2 人

生物の授業。授業の初めに success criteria が表示される。教師が問いかけ、生徒が答えるという形式で授業が進められる。時に近くの人との話し合いが取り入れられていた。生徒は疑問があるとすぐに教師に質問し、教師はその質問内容を全体共有しながら、解説を行っていた。

#### Year13 Sociology

生徒：男子 4 人、男子 9 人

面談法についての授業。初めに用語の確認小テストが行われ、その後、グループ活動が行われた。グループ活動は、教科書に載っている場面を想定して取り組むものであった。また、教科書は買う物ではなく、借りる物であるという認識が強い。授業前に自ら図書館で借りたり、授業中に教師が貸し出したる。

#### Year8 Science

生徒：男子 13 人、10 人

論理回路についての授業。教師が一人ひとりを回り、宿題の取り組み状況を確認後、授業が始まる。問題を全体に提示し、問題解決のために、実際に回路を作成する。1 グループ 3 人程度の小グループで、一人ひとりが意見を言いながら、試行錯誤しながら回路を作成している様子が多く見られた。

## 【Burnham Grammar School】

### Embracing Challenge

田部井 淳 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

#### (1) 授業に関する考察

Burnham Grammar school での授業は、講義形式の形がほとんどである。しかし、教師によっては、課題を調べて討論する形式をとる授業もある。この学校は、A level ために、勉強をしている生徒が多いので、そのような授業になるのかもしれない。日本でいうと有名大学に進学するための進学校に相当する。また、生徒たちも選抜試験があり、話を聞いた生徒たちも進学する目的を明確にしている生徒たちであった。A level の授業は、1 時間は授業をやり、1 時間は家庭で学習する程度の学習量である。時間割の中には、自由な時間も必ずあり、その時間で自主学習を行う。時程は、1～5 時間目までである。目的意識がはっきりしているため、学習量が多く感じられるが、日本の進学重視の学校の生徒も学習量では変わらないと感じた。生徒に人気のある授業は、地理の授業である。その理由は、生徒たちからの聞き取りによると以下のような理由であることが分かった。

①討論の授業が多い。②その討論の中で、生徒一人一人の個性を把握したり、生徒一人一人の目標を把握して、適切な助言をしてくれる。③生徒が行ったことに対して、評価をきちんとしてくれる。

このような理由で、地理の先生が人気があり、好きな授業としてあげていると考えた。このことは、日本の授業にも当てはまると感じてとても興味深かった。自分の理科授業の実践でも同じような印象がある。児童たちが自由に発想して、自由に実験をして学習を進める形式の授業は、児童に人気がある。その児童の活動をきちんと評価する。

この学校では、この学校では、教員評価の一つとして、生徒が Alevel を獲得するための技術が求められる。生徒が聞き取りによれば、学習の手立てへの助言や学習管理に関する指導ができる教師が人気であり、生徒からの信頼が、さらに教師の指導力を高めていくことが考えられた。

#### (2) 成績評価についての考察

##### 総合的な評価基準について

生徒一人一人の状況を確認するためのテストが年に 2～3 回ある。成績は、評価の段階に応じて色分けしている。青は「よい」、黄は「緑になるためには、努力が必要」、赤は「非常に努力しないといけない」、である。成績の良い順に、青、緑、黄、赤と定めている。それとは別に努力レポートがあり、1～5 までである。5 は「非常に努力している」、1 は「努力していない」となり、努力を一つの評価基準として評価するものである。

##### 成績についての具体的な例：生物 Year13

生物においては、知識、活用、分析の 3 つの観点に分けて評価する。それぞれの表記の仕方は、「A01: 知識について / A02: 活用 / A03: 分析」となる。それぞれのテスト、レポート、実験観察などから成績を出している。テストは、学期に 3 回程度である。総合点は、最高点が 100 点で、A 評価 88 点、B 評価 77 点、C 評価 66 点、D 評価 55 点、E 評価 45 点の基準を設けて、評価している。この評価観点は、学校裁量によって評価基準を設定している。多くの生徒が B 評価をとる。

##### 日本との比較

日本の教育課程では、国レベルの評価基準があり、絶対評価によって評価する。日本では留年が少なく、殆どの生徒が進級できる。一方、Burnham Grammar School では、上記のような明確な基準がある。その基準に関して、評価をして悪い成績をとると補習があったり、進学したい学校に進学することができなかったりする。確認テストで目標に達していない生徒に対する補助的な指導が充実しているように感じた。Sixth form の成績で、どの大学に進学できるかが決まるので、日本とは違いテストのみで進学できるのではなく学校での活動なども全部考慮されての選抜試験であるように思う。そして、この制度を Burnham Grammar school の生徒たちは、よく知っているし、活用しているように感じた。



## 社会教育施設見学

### 大英博物館→国会議事堂→ウェストミンスター寺院→バッキンガム宮殿

澤田 隆視（帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース）

#### 1 社会教育施設基本情報

施設名：①大英博物館

②国会議事堂&ビッグ・ベン

③ウェストミンスター寺院

④バッキンガム宮殿

所在地：① Great Russell Street, London WC1B 3DG

② Westminster, SA 0AA

③ 20 Dean's Yard, SW1P3PA

④ SW1A 1AA

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 施設の説明

大英博物館は、約 700 万点の所蔵品のうち、約 15 万点を 90 室以上のギャラリーで公開する世界最大規模の博物館である。国会議事堂は、イギリス議会制民主主義のシンボルである。ビッグ・ベンと親しまれる時計塔もある。ウェストミンスター寺院は、英国国教会最大のゴシック建築で、歴代国王の戴冠式が行われている教会である。バッキンガム宮殿は、イギリス王室の宮殿で衛兵交代式が有名である。

##### (2) 施設の様子

大英博物館は、パルテノン造りの正面玄関で、荘厳かつ重厚な様子であった。1 日では足りないほどの展示品である。古代エジプトや古代ギリシア、古代ローマの展示品が有名だが、日本など東洋の展示もある。世界中に植民地を持ち「太陽の沈まない国」と言われた大英帝国の博物館だけあり圧巻であった。

国会議事堂の近くには「鉄のカーテン」の言葉で有名なチャーチル首相の銅像もあった。

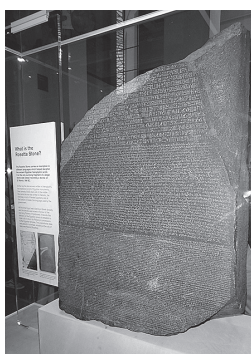
ウェストミンスター寺院は、最近ではヘンリー王子の結婚式が行われたことで有名である。

バッキンガム宮殿は、衛兵交代式の時間ではなかったが、ここも多くの観光客が訪れており、衛兵行進の様子も見学することができた。どの建物もロ

ンドンを象徴するような威厳があった。

##### (3) 見学の様子

2016 年 9 月 10 日（土）は、あいにくの天気のため



めもあってか、大英博物館は大変混雑していた。

まずはロゼッタストーンを見学した。思っていたよりも大きいと感じた人もいたようだ。表面はよく世界史の資料集などでも見ているのだが、裏面はただの岩であることも

わかった。日本の世界史の教科書に挿絵で載っているような物が、たくさん展示されていた。

ラムセス 2 世の胸像や人面有翼牡牛像も巨大で



あった。古代エジプトやアッシリアの大帝国の力強さを感じることができた。パルテノン神殿の彫刻など、ギリシアなど発掘された国から、

返還を求められているものもあった。

#### 3 訪問調査から得たこと

大英博物館などの博物館では、基本的に無料で寄付を受け付ける入場方式なことが、日本との大きな違いであった。日本では写真やビデオ撮影禁止の展示品も多いように思うが、イギリスでは写真やビデオ撮影は OK であった。

土曜日の見学だったため、観光客が多かった。日本だと平日に行くと、児童生徒が社会科見学でよく行くので、イギリスでも興味のあるところである。



## 【St. Michael's RC Primary School】

### 愛情あふれる家族のような温かい学校

池田 彩乃 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 学校基本情報

学校名: St. Michael's RC Primary School

所在地: Esh Village County Durham DH7 9QY

校長名: Mrs. J. Bruton

開校年: 1975年に、校舎の一部である修道院が建てられた。

経営方針・教育目標: 誰もが異なるニーズを持っているため、公正に、そして平等に教育することを目指している。子供たちにとって学校は、安全な場であることを保障する。また、子供たちは「Their Age (年齢)・A disability (障害)・Their ethnicity, colour or national origin (民族分類、色、国籍)・Their gender identity (性、アイデンティティ)・Their religion or belief (宗教又は信念)」という5つについての差別を経験しないように教育する。

児童生徒数: 175名 (4～11歳)

学級数: 7クラス

教職員数とその内訳: 20名 (校長1名、副校長兼教員1名、教員8名、アシスタント11名)

特色: イエス・キリストの精神を大切にしている。キリストの福音書からの教えで、子供の可能性を引き出すことができるように先生方が努力をしている。

日課 (例): Year5の日課

表1: 月曜日 (通常日課)

9時～ 9時20分	Whole School (全校集会)
9時20分～ 9時45分	Handwriting Spelling (作文 つづり)
9時45分～ 10時45分	English (英語)
11時～12時	Maths (算数)

13時～14時	R:E [Religious education] (宗教教育)
14時15分～ 15時	R:E [Religious education] (宗教教育)
15時～ 15時30分	

表2: 金曜日 (特別日課)

9時～ 9時20分	Spelling (つづり) Maths (数学)
9時20分～ 9時45分	SMSC [Social, Moral and Spiritual Competencies] (社会的モラルと精神的な力) / School council (児童会会議)
9時45分～ 10時35分	English (英語)
10時35分～ 11時30分	Maths (算数)
11時30分～ 12時	Celebration (式典)
13時～14時	Topic (総合的学習)
14時15分～ 15時	Topic (総合的学習)
15時～ 15時30分	Guided Reading (読解)



写真1 St. Michael's RC Primary School 前で

## 2 訪問調査の記録

### (1) 学校説明

学校はダラムの中心にあり、100 年以上の歴史がある。学習環境が整っていて、教師の愛情が深い地域の公立学校である。毎日集会室で黙想をし、礼拝する時間がある。学級の 3 分の 1 の子供は、キリスト教徒ではないが、キリスト教徒でない子供も一緒にお祈りをする。

教育課程は学校裁量で柔軟に決め実施されている。水曜日は PSHE という時間がある。PSHE とは、Personal Social and Health Education の略で、社会的スキルを学ぶ授業であり、イギリスの学校で取り入れられている。先生方からの話から、日本でいう道徳と保健体育に似ている内容であった。また、金曜日は特別日課で Celebration という時間があり、誕生会を開いたりや今週の良かった人を表彰したり、児童会をしたりすることもある。

様々な事情で朝ご飯を家で食べることができない子供のためのブレックファーストクラブ、放課後は保護者が迎えに来るまで学校で預かってくれるティークラブがあり、アシスタントにより支援する制度である。また、子供が買い物の勉強ができるように、パンの棒（セサミトースト）、クラッカー（ライスケーキ）、ゴマビスケット、シリアルを売っている時間がある。しかし、子供たちには健康であってほしいという学校の思いから、チョコレート等の甘いお菓子は禁止している。

### (2) 施設の様子

集会室というとても広い部屋があり、そこでお祈りや集会が開かれる。授業でも使うことがある。

Foundation Class（4、5 歳クラス）には、教室にトイレが設置されており、身辺自立ができるように工夫されている。また、教室に隣接して政府が規定しているグラウンドがある。

### (3) 授業の様子

#### ① Year2『モーニングジョブ』

「Write an interesting sentence using suddenly.（突然という言葉を使って、面白い文章を作ろう）」という学習課題をもとに、学習が始まった。子供た

ちがどんな話をしているのか聞き取ることができなかったが、発表する子供の発言が面白く、学級の子供たちが一斉に笑い、場が和やかになった。和やかになったところで、先生が「Spelling Punctuation and Grammar.」と板書し、子供たちに句読点や記号（! ? , “ ”）などをどのくらい知っているかと問いかけ、子供たちが次々と答えていった。その後、Plural Suffixes という複数形の接語尾の学習を行った。先生が、Plural というのは、1 よりも大きい、1 よりも重いという意味を持っていることや、複数形になるとどういう発音であるのかということがわかるように先生が発音して、子供たちがわかりやすいように指導の工夫がされていた。

#### ② Foundation Class『総合学習』

遊びを中心とした時間だった。おままごとや室内用砂遊び・水遊びができるように設定されていた。子供たちは自分が好きな遊びを選び、友達と仲良く遊んでいる様子が見られた。先生方は子どもが遊んでいる様子をタブレットで写真を撮り、どんな遊びをしているのか、誰と遊んでいるのか等の記録を残していた。教室の隅の方では、学習にどのくらいの習得があるのか、アセスメントが行われていた。

#### ③ Year5『算数』

授業の始めに、1 年生の時に勉強した算数の内容「何を足すと 10 になるか」を復習した。その学習をもとに、「1 番近い 100 の倍数になるには何を足せばいいか。」を先生が例題を出しながら、学級のみんなで一緒に解いていった。その後、先生が 10,000 の値の数を口頭で言い、答えをホワイトボードに書き、2 人組で答えを確認し合った。確かめ合うことで安心感のある学習環境が作られていた。

### (4) その他

学校には、ADHD や自閉症の子供も在籍している。その子供たちを中心とした、クールダウンができる場所が夏休み中に作られた。部屋の中は、子供が気持ちを落ち着くことができるように青を基調としていて、青いライトで照らされており、ふかふかのクッションやかわいいぬいぐるみが置かれて、居心地のよさそうな空間だった。今後、子供と話し合いながら、部屋の中を変えていくという話だった。

## 【St. Michael's RC Primary School】

### 愛情あふれる家族のような温かい学校

田部井 淳 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

#### (1) 学校の組織、雰囲気

女性の先生の割合が高かった。地元の学校という雰囲気であった。教室にも多様な子供がいるように観察をしていて感じた。休み時間の様子の観察では、教員たちは、外に出て安全管理をしていた。安全管理のために校庭での子供たちへの観察をする一方で、強風による簡易バスケットが転倒したときの対応は子どもたちに任せるなど、安瀬管理に対する日本の違いを感じた。子供同士の喧嘩、泣いている子供への対応の仕方、怪我の対応の仕方などのトラブルの対応に関しては、日本とそれほど変わらないと感じた。

#### (2) 授業について

算数の授業は、グループごとに、それぞれのレベルに応じた学習課題に取り組んでいた。人数が25人なので、人数に関しては日本よりも少なくまた、算数については、アシスタントティーチャーがいて、2人で1クラスの授業を担当する。それぞれのグループには、そのレベルに応じての教材があった。例えば、ブロック、計算機、おはじき、ストロー、パソコンなどである。時間をかけて、自分たちで解答していく授業形式であった。先生は、グループを回って指導助言していた。見学時の課題については、学期の始まりであったので、復習プリントであった。その解答を教える時には、プリントの解答が記載してあるテキストを使っているの、解答の仕方を重視した指導法を観察することができなかった。日本では、教授方法について研究している先生が多くいることを考えると日本の教師の方が授業での指導の仕方については、専門性が高いのではないかと感じた。グループごとに課題に取り組んでいたが、グループにより、活動時間が長くなると集中力も切れてしまうグループもあった。その時に、先生が声掛けをしていたが、その数が多くなると処理できないと感じた。日本の学校に比べて、少しゆっくりとしたペースであった。初めに、復習時間を20分ぐらいとっ

てから、新しい単元に進んでいた。

#### (3) Foundation Class (4歳)

この学校の敷地にある施設についてとても興味深かった。4歳児のクラスのある学校では、黒板、水場、ボール、ガーデニング、絵を描く、遊具などについて国の基準がある。そのために、どの学校に行っても同じような設備が整っていた。学習環境を整備することによって、子どもが、いろいろなことを体験できるのは良いと思う。日本では、幼稚園、保育園の時期に、これほどの設備を用意できている施設は少ないのではないかと感じた。また、1クラスの人数もこちらの学校の方が少ないように感じた。幼児期の教育については、きめ細かい指導がされている。担任は教室の片隅で、パソコンを使いながら、学習などの理解度を確認していた。これは、一人一人の子供を対象に行っていたので、素晴らしいと思った。

#### (4) Key stage について

この学校では、Key stage1、2を行う。Key stage1は、Year2で行うテストである。達成度テストで、学習範囲も決まっている。Mathテスト、readingテスト、SPaGテストで行われる。SPaGとは、Spell(綴り), Punctuation(句読点) and Grammar(文法)の達成度を測る全国統一テストである。今回は、英語の授業を見た。Year2なのだが、単語を書いたり、複数形、単数形などの概念もきちんと教えていた。担任教師によれば、高学年相当の問題もあり、子どもたちの負担も大きいがポテンシャルは高い。日本の教育でも学力テストがあるが、その結果が教員の評価や学校評価にかかわってくることはそれほどない。イギリスでのKey stageでの結果は、日本に比べてとても厳しいものであると感じた。その結果により、教員評価や学校評価にかかわるし、その結果が低いと国の調査の頻度が高くなると言っていたのが印象的であった。学力テスト結果による教員評価、学校評価は、教育に対する責任感が生まれるのかもしれない。



## 【Durham School】

### ハウス（寮）のある伝統ある私立学校

Independent Co-educational Day & Boarding School (Age3-18)

小野 貴大（帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース）

#### 1 学校基本情報

学校名：Durham School

所在地：England Durham

校長名：Kieran. McLaughlin

開校年：1414 年

経営方針・教育目標：完全な教育を学生に提供すること。それらの達成を願い、他者の尊重、生活の自信を浸透させることが学校の使命としている。

児童生徒数：476 名（3 ～ 18 歳）

特色：3 歳から 18 歳までの子どもたちが在籍している。

元々は男子校だったが 1985 年から完全共学となり、男女ともに寮があり各地から子どもたちが集まってきている。また、卒業生には政治家や宗教者、イギリス貴族も多数含まれる。

Durham School の primary school は Bow, Durham School という別の敷地にあり、3 ～ 7 歳までの子どもたちがいる。

年齢が上がるにつれて校則の自由が増していく。

日課（例）：

8:30am-8:45am	登録 & House Meeting
8:45am-9:25am	Period 1、集会、チャペル
9:30am-10:15am	Period 2
10:20am-11:05am	Period 3
11:05am-11:25am	休憩
11:30am-12:15am	Period 4
12:20am-1:05pm	Period 5
1:05pm-2:20pm	ランチ & 活動
2:20pm-3:00pm	Period 6
3:05pm-3:45pm	Period 7
3:50pm-4:30pm	Period 8
4:30pm-4:55pm	休憩 or チャペル

（金曜 16:50- 17:15）

5:00pm-6:00pm 準備 1 または活動（月～木）  
金曜日は自由な時間

6:00pm-6:45pm Tea

6:45pm-7:45pm 準備 2

8:00pm-8:15pm 点呼と夕食

8:15pm-9:15pm 寄宿生は自由時間

9:30pm-9:45pm 7・8 年生就寝（月～木）

金曜日は 21:45 就寝

9:45pm-10:00pm 9・10 年生就寝（月～木）

金曜は 22: 00 就寝

10:00pm-10:30pm 11 年生就寝（月～木）

金曜日は 22: 30 就寝

10:30pm-0:00am Sixth form 就寝

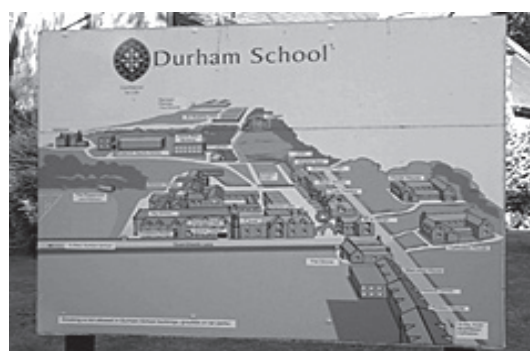


図 1 Durham School 全体図



図 2 Durham School での記念写真



## 2 訪問調査の記録

### (1) 施設の様子

授業時間は45分で、子どもたちは、授業ごとの学習ケースをもち、教室を移動して授業を受ける。

教室は各教科の教室になっており、壁にはその教科に関連した掲示物がたくさん貼られていた。

### (2) 授業の様子

#### ○ primary school

##### ・ Math (Year6)

小数点以下の数字を表す学習を行っていた。一斉授業形式で、教師はホワイトボードで説明していた。子どもたちも小型のホワイトボードを一人一人持ち、教師が出す問題にホワイトボードに答えを書いて提示していた。(ex. 摂氏0℃から2℃下がったら何度？や小数点はどのように打つのか？等)

教師は「日常のどんな場面で小数点を使っているでしょうか？」という発問をして、お金の小数点の打ち方について説明していた。(ex. £3.00)

次に、数直線で8.25の位置はどこなのかという課題に取り組んでいた。日本では、細かくメモリを打って位置を考えるが、教師はホワイトに線を引き、この線上のどの辺かというように問うていた。

教科書は日本での解説や解き方が書いてあるものではなく、テキスト集や問題集のようなもので、問題を解くために使っていた。また、出来ていない子には先生が隣へ行き、個別に直接教えていた。



図3 授業風景 (math)

##### ・ Science (Year3)

授業は生き物を構成する要素ということで授業が行われていた。理科室は全員が黒板の方を向いて座れるような座席配置だった。中心に5人ずつ座り、サイドに3、4人机の上には備え付けの器具があるだけで、そのほかは何もない状態だった。鉛筆やハサミ、ペンなどはすべて教室にあり、それを貸し出していた。

##### ・ French (Year3)

一斉授業形式で授業が行われていた。

まず、全体で挨拶を行い、その後個々に名前を呼び、挨拶の仕方の練習をしていた。その後、小さいプレイルームに移動し、体を動かしながらフランス語の数の言い方、自己紹介の仕方をやっていた。



図4 教室風景 (French)

#### ○ Durham School

##### ・ History (Year10)

歴史の授業は、王政における王の権力の学習で、まず前時の復習を行った。教師が、一斉授業の形式で説明していた。子どもたちの知らない言葉が出てきているので、新しい用語を学習するために、それを子どもたちに1つ1つ教科書から調べてノートにまとめるという活動を行っていた。

## 【Durham School】

### 授業考察 ～日本と比較しながら～

澤田 隆視（帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース）

#### 1、小学 6 年の算数

私立の学校ということもあり、教科担任制の授業である。算数の教室は最上階のドーマーのある教室のような教室で行われていた。イギリスの公立小学校と違って男性教員も多く、教員 1 人で 12 人の児童を指導していた。指導人数が全般的に日本と比べて少ないが、日本でも算数は 2 学級を 3 グループに分けて授業をするなど、少人数加配教員も指導することがあるので、似たような人数である。

プリントで問題が配られたのは日本でもよくあるが、解けたら各自のホワイトボードに答えを記入して、上に上げて教員に見せる方法が行われていた。

小数点の学習で、2 分の 1 や 4 分の 1 がどのあたりか、数直線を児童に書かせていたが、日本と違ってメモリなどは無く、感覚的につかませると共に、どうしてその位置にしたのかといった、「なぜ?」「どうして?」といった理由を考えることを大切にしていた授業であった。

#### 2、小学 3 年の理科

理科室で理科も教科担任制で、男性教員 1 人による授業である。3 年生は 21 人である。背の順で移動してきたのは日本と同じであるが、イギリスでは小学生から制服があるのが一般的であるので、服装を直してから、理科室へ入った。3 年生になって初めての授業であり、理科は生物、物理、化学があることの説明があり、本時の授業内容は「生物の 7 つの特徴」であった。日本と比べると理科は学習内容が高度であると感じた。

日本との大きな違いは、児童が何も持たずに理科室に来たことである。日本で特別教室での授業というと、筆箱やノートを持って行くことが多いが、書く用紙も、鉛筆も色を塗るペンも全て理科室にあって、教員が配って使用後に回収していた。

#### 3、小学 3 年のフランス語

フランス語の女性教員 1 人が理科室に呼びに来て、フランス語の教室へ移動した。

日本との違いは第 1 外国語がフランス語であることである。イギリスにとって重要な近隣の国なのであろう。スペイン語の小学校もあるようだが、経済力のあるドイツ語ではないことが注目点である。

授業は日本の英語による外国語活動に近かった。フランス語で名前を呼ばれたり、立ったり座ったり走ったり、身体運動をしながら数字を学んだりしていた。小学校は校舎ごとに鍵がかかっている、セキュリティが日本より厳しかった。

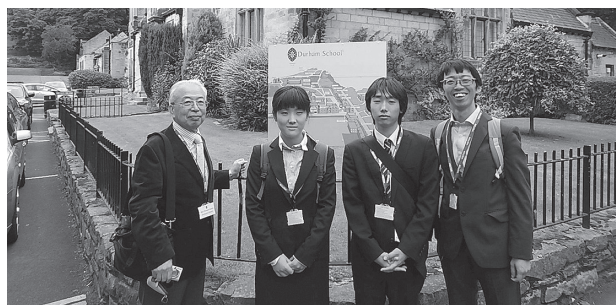
#### 4、高校歴史

アングロ・サクソンの王朝に関する授業で、教員主導の発問応答で前時の復習がされた後、エドワード王の硬貨から読み解けることなどを、教科書を見ながら、各自書きまとめていた。

17 人のうち女子生徒は 2 人で、日本の社会科の教員で考えても男性が多いので、歴史好きに男性が多いのは、世界共通なのかもしれない。

日本とは掲示物に大きな違いがあった。第 1 次世界大戦の戦車のポスターがあり、ヨーロッパが 2 度の世界大戦の戦場になったことを重要視していた。

またヨーロッパを 2 分した東西冷戦で、特に社会主義陣営に対する警戒の歴史は今でも大きく、スターリンやレーニンだけでなく、人口衛星のスプートニクや宇宙飛行士のガガーリンの肖像画といった、ソビエト連邦に関するものが多かった。



## 【Durham High School for Girls】

### 伝統ある質の高い女子学校

佐藤 光司 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース2年)

#### 1 学校基本情報

学校名: Durham High School for Girls

所在地: Farewell Hall South Road Durham DH1 3TB

校長名: Lynne Renwick

開校年: 1884年

経営方針・教育目標: 思いやりのあるコミュニティー、  
友好性に基づき、キリスト教の教えのもとすべての  
個人の能力が評価される。すべての女子の能力を  
彼女たちの人生の中で引き出すために。

児童生徒数: 約450名程度 (3～18歳)

学級数: 各学年1～2クラス ジュニアハウスは  
クラス最大24人、シニアハウスでは20名、  
Sixth form ではより少人数のクラスになる。

特色: 3歳～18歳までの女子校。シニアハウス (11  
～18歳) は外部からの入学者も50%と多い。  
キリスト教精神を大切にしているため校内には  
牧師がいる。また、学業面だけではなく子供と  
大人のつながりを大切に、様々な面でサポー  
トする学年担当スタッフがYear7～11の期間  
いる。個人的なトラブルの相談から家庭と学校  
との連携など子供が安心感をもって学校に通え  
るようなシステムを採用している (= パストラ  
ルシステム)。

日課 (例): ジュニアハウス (日本で言う小学校段階)  
クラスでの学習が基本であり、担任が授業を行  
うが、フランス語、体育、芸術の学習につい  
ては専科教員が授業を行う。

8時40分: 授業開始、15時40分: 下校

(授業時間はジュニアハウスでは基本的には30  
分、科目によっては1時間行うこともある。シ  
ニアハウス以降は65分授業が基本になる。)

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 学校説明

1884年創設132年の伝統のある学校である。イ  
ギリス国教会が基盤であり、キリスト教の原則に基  
づいた活動が行われている。北東イングランド最初  
の女子校であり、保育園からSixth form までの幅  
広い世代の生徒が通っている。学業面だけでなく、  
スポーツや芸術活動も盛んであり、2016年のリオ  
デジャネイロ五輪では、イギリス代表選手を輩出し  
ている。昨年度はGCSEでもA評価を6人取って  
おり、その内4名がオックスフォード大学に進学し  
ている。

##### (2) 施設の様子

平屋づくりで日本の学校のような3～4階建ての  
ような建築ではない。施設内は生徒が作成した作品  
がいたるところに展示してあり、芸術面にも力を入  
れているということを感じた。すべての教室を見た  
わけではないがICT機器はイギリスの公立学校と  
比べてそこまでの差があるように感じない (電子黒  
板もすべての教室に配置されているわけではない)。  
3～18歳という幅広い世代の子供がいる施設だが、  
棟ごとに分かれて学習しているようなので校内は移  
動がしやすい環境になっている。図書館も開放され  
ており、自主学習を行っている学生がジュニアハウ  
スからSixth form まで幅広くいた。



▲ Durham High School for Girls の外観



### (3) 授業の様子

#### ◇ math：数学（Year13 5名）

電子黒板を使用した授業展開。授業冒頭に本時で扱う問題の例題を出し、全員で解いていく。その後、例題を数題だし、各自で解いていく。その際に生徒は問題の答えをミニホワイトボードに記入し教師に見せるという活動を行っていた。教師は“Chain Rule”（公式）を強調し、とにかくスピーディーに問題演習を進めていった。話し合い活動を行い、生徒たちで答えを導き出すという活動ではなく、例題の提示→公式の説明→類題演習という個人活動中心の学習スタイルであった。板書は問題ごとに電子黒板をスクロールさせていた。日本のように1授業1板書のようなスタイルではなく、日本の予備校での学習スタイルと類似している。

#### ◇ English：英語（Year11 15名）

##### ～ Language and Structure ～

ワークシートを配付、個人活動→グループ学習といった授業展開。授業の内容はGCSEに準拠した形で構成されていた（GCSEのテキストを使用）。授業の冒頭で生徒に対して評価についての説明があった。GCSEの基準での評価になっているため、授業中の教師からの言葉かけもGCSEを想定しているので効率よく文章を読み解くことを求めている。細かい内容としては、日本でいう比喩、倒置法などの文章表現がどうして使われているのかを考えるという授業であった。文章中のカンマの理由などを作者の意図などから読み取るという学習を行っていた。

#### ◇ Chemistry：化学（Year12 4名）

今学期、1回目の授業であった。分子、原子についての学習を行っていた。学生個々に違うテーマが与えられ、それを前に出て一人ずつプレゼンテーションしていた。教師は1つの事柄についてかなり詳しく突っ込んで生徒に質問を行う様子が見られた。普段からプレゼンを行っているように感じる。

この学校ではYear11の時に理科について大きくくりで学習を行い、物理か化学をYear12では選んで学習を行う。実験などは学年が若いうちに行い、学年が上がると理論を学ぶ。

#### ◇ Psychology：心理学（Year12 5名）

授業形態はコの字に机を配置し、教師が問題提起し、学生が順番に意見を述べていくというものであった。学習内容は犯罪心理学についてであった。週4回、授業があり、教師の言葉や他の学生の発言を受けてそれぞれが自分で考えた内容を熱心にメモに取るなど、熱心に授業に取り組む生徒の様子が見て取れた。今回の授業では認知的、行動的、生理学的の3つの視点から問題に迫っていった。結論を出すのではなく、自分ならどう考えるかというということに力点を置いた授業であった。

このような授業は日本には該当する授業がなく、品川区で行われている市民科が該当するのではないかと感じる学習内容であった。

### (4) その他

#### ◇ 個人評価の手法

電子黒板の利点を生かし、生徒の学習状況をエクセルで管理を行っている授業があった。ただ、少人数（5人）だからこそできるという点やイギリスのように生徒の学習状況をオープンにしているという学校事情があるため、日本での応用は難しい。

データベースで生徒の評価を管理している。学業不振の生徒とは保護者を交えて話し合いが行われる。

#### ◇ Centre for Evaluation and Monitoring

##### “CEM”システム

イギリスではGCSEのデータを1つに集約するシステムがあり、学校ごとに管理を行っている。（＝CEMシステム）そのため、各学校はGCSEの成績B以上をとるための施策を常に考えている。

イギリスの場合、GCSEの評価が低いと学校の評判が低下し、学校の予算が削減されてしまう。そのため、公立学校では、GCSEの評価がとても重要である。結果次第では管理職が総入れ替えになる場合もある。（外部からの審査も入ることもある）

#### ◇ ハウスシステム

たて割り活動を3～18歳で構成している。卒業まで同じグループでの活動となる。姉妹がいる場合には同じグループの所属となる。母親や祖母も卒業生であれば同じグループ所属になる。幼少期からグループに所属しているため学校へ愛着がある。



## 【Durham High School for Girls】

### 深い学びの場に触れて

星野 留美 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

8月下旬、この学校のホームページを見たときにまず飛び込んできた記事は、「リオデジャネイロオリンピックの体操種目で Amy Tinkler が銅メダルを獲得」という内容であった。在籍生徒の活躍を讚える記事である。

訪問時、チェックのワンピースを身に着け、きれいに髪を束ね、整列して教室移動する幼児集団は、こちらが手を振ると振り返すことはせず、はにかんで通り過ぎた。すれ違う子どもたちの姿や態度からも、この学校の教育方針を垣間見ることができる。

この学校は、いわゆる「お嬢様学校」と言っていだらう。130年あまりの歴史があり、England 北東で最初の女子教育を行った伝統ある私立学校である。同窓会が組織され、定期的に集まりイベントを行っているという点からは、学校とOGの密接なつながりがあり、卒業後も学校とその在籍する子どもたちを支えていることがうかがえる。

学校として子どもたちを温かく見守る姿勢は、我々のような海外からの訪問者への対応でも感じられた。ヘッドマスターと呼ばれる、いわゆる学校をマネジメントする校長が我々を歓迎してくれ、自分の学校に誇りを持ち丁寧に解説する様子は、言語を超えてその思いが伝わってきた。また、清潔で手入れの行き届いた施設、整頓された校内の掲示など、この研修で見学した学校の中でも群を抜いていた。

Durham High School for Girls は3歳から18歳までの女子を対象とした学校である。様々な分野で子どもたちの潜在能力を引き出すこと、学術の卓越性、生涯学習の基礎を作るとともに、スポーツ分野、クリエイティブな分野で個々を伸ばすことに力を置いている。それは、校内の至る所に子どもたちの芸術作品が飾られていることや、前述のオリンピックで活躍した生徒の例からもわかる。そして、カリキュラムや授業内容からも日本とはまた違う、個々の伸ばし方があることを感じた。

例えば、Year12の化学の授業は、いわゆる講義

形式ではなく、教師が一人ひとりの生徒に課題を与えた上で、考えた内容を一人ずつ絵や言葉で示しプレゼンテーションさせていた。さらに発表内容に対して「Why do you think?」と問いかけ、他の生徒も巻き込みディスカッションして深めていた。同じく Year12 の心理学の授業では、「なぜ人は犯罪を犯すのか」「遺伝子によるのか環境によるのか」というテーマを扱っていた。教師は座ったまま、5人の生徒に休む間もなく問いかける。生徒たちは、自分の考えを述べ、教師とのやりとりが続いていく。教師はスライドで映し出したテキストをもとに話をしていくのみで、板書をする必要もなければ生徒のノートをのぞくこともない。しかし、すべての生徒が休みなくペンを動かし続け、教師や他の生徒の発言を聞きながら、自分の思考を膨らませ、それをノートに熱心に書き留めていく姿があった。

どちらの授業も生徒数が4~5人と少人数であり、教師との対話により学びを深める手法である。どちらの授業も生徒の希望により履修しており、意欲・関心が高い上に、内容の扱いは覚えることが中心の学びではなく、考え深めて自分の力にしていくスタイルであった。

イギリスでの学校見学を通し、この学校も含め生徒の評価(成績)がオープンであることが多い。そういった取り組みも、生徒の能動的な授業参加を後押しする要因のひとつではないかと考える。また、学校運営についても外部からの評価がオープンになっており、その結果をもとに予算がついたり保護者が学校を選んだりする。それは能動的な学校運営にもつながっているのだろう。

イギリス流のアクティブラーニングに直に触れる中で、教師も生徒も、日本とは違うことは明らかであった。違いはどこから、どうして来るのか、それを整理することは今後の自分の課題である。

## 【Durham Johnston Comprehensive School】

### 言語教育に定評の学校

山下 達也（帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース）

#### 1 学校基本情報

学校名：Durham Johnston Comprehensive School

所在地：Crossgate Moor, Durham, DH1 4SU

校長名：Michael Wardle

学校の特徴：この学校は近年、生徒の実績がよく入学者が年々増えている。言語の授業に定評がある。

児童生徒数：1600 名（11 ～ 18 歳）

教職員数とその内訳：職員 200 名そのうち teaching staff が 120 名

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 学校説明

Durham Johnston Comprehensive School は、Year5 ～ Year11 までと、基本的に 16・17 歳が在籍する Sixth form の生徒、合計 1600 名の生徒が在籍する学校である。また職員は 200 名で、そのうちの 120 名が教師である。



▲校舎の様子

##### (2) 施設の様子

13 時頃に学校に着き校内に入ると、生徒が長蛇の列を作り、ランチを待っていた。ランチを受け取った生徒は、テーブルに腰かけ、友人らと話しながら食事をしていた。受付を済ませた後、生徒に校内を案内してもらった。

まず、2F の図書館を案内してもらった。ここでは、本を読む・自習をするなどの他に、食事をするスペースとしても使われるそうだ。図書館の隣には、コンピュータールームが 2 つあった。そのうちの 1 つは Sixth form の生徒に向けて調べ物ができるようになっていた。もうひとつは、プログラミングの授業が行われていた。

次に自習室に案内してくれた。自習室は、空き時間に生徒が自習する部屋として開放され、この日も満席であった。ノートパソコンの貸し出しもでき、パソコンを広げて自習に取り組んでいる生徒もいた。自習室を後にすると、案内役の生徒たちは廊下のあるスペースに案内してくれた。そこには、指紋認証の ATM が設置され、ランチや校内にある売店で食べ物を買うときに使用すると説明してくれた。

校内には、体育館、ダンススタジオ、ランニングマシンを備え付けたジムがあり、さらに案内役生徒の話では、ジムにはラジカセなどの音楽機器もあり、iPhone をつないで自分たちで音楽を流すもできるので、町中にあるジムのような雰囲気でトレーニングすることもできるようだ。

最後は科目ごとに分けられたフロアの教室を見学した。イギリスは、先生が教室を 1 つ持ち、そこに生徒がやってきて授業を行うというシステムであったが、この学校も例外ではなかった。私たちが訪問した時期は、新年度で新しく入学した生徒もいたころから、生徒がどこに行けばいいか教える案内役の先生がいた。

### (3) 授業観察の記録

#### ①スペイン語 Year8 30名ほど



▲スペイン語の授業の様子①

途中から参観したため全て見ることはできなかったが、この授業は新年度初めての授業ということもあって、Hola や bien といったあいさつで使われる言葉について扱っていた。使用していた教材はノートとテキストで、授業終了後に回収していた。教室は先生1人に対して生徒が正対して座る一斉教授型で、授業の様子は日本とあまり変わらなかった。

授業の流れとしては、スペイン語の単語を英語に翻訳し、それを先生がホワイトボードに書いたものを生徒がノートにメモを取っていた。その後、意味を確認するために生徒を指名し意味を答えさせていたが、特定の1人が答えるというのではなく、特に手を挙げていなくとも生徒を指名し、問題なく答えていた。その後、席が近い人でペアを先生が設定し、簡単なあいさつの会話をしていた。



▲スペイン語の授業の様子②

生徒たちが会話の練習をしている間、2人の男性スタッフが教室にやってきた。どうやら電子黒板の接続が悪く、画面が映らなかったため先生が要請したようだ。後で話を聞くと、ICTの専門のスタッフもいると説明を受けた。

#### ②フランス語 Year7 30名ほど

こちらもスペイン語の授業と同様に、新年度最初の授業であった。まず、先生は生徒が日常生活で聞いたことがあるフランス語を聞いていた。Bounjour や Merci などのあいさつを生徒が発言し、それを拾いながら「こんにちは」「お元気ですか」「ありがとう」といった簡単なあいさつを取り上げホワイトボードに書いていた。生徒はノートにメモする人もいれば、しない人もいたといった感じであった。その後は生徒同士での発音練習、先生と生徒のあいさつの練習、そして先生が作成したと思われるワークシートを先生と一緒に進めていくという内容であった。

印象的だったのは、単語の発音練習の際に、単語を強弱つけて発音させていたことである。このような発音練習はあまり見られないと感じた。フランス語などは、言葉の発音に強弱をつけることで、表現を微妙に変えていくこともコミュニケーションの1つなのかなと感じ、興味深かった。



## 【Durham Johnston Comprehensive School】

### 2 名の生徒の話から ～学びへの責任・多様性～

木村 さとみ（帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース）

語学教育に力を入れている学校で、8 年生のスペイン語の授業と 11 年生のフランス語の授業を参観した。今回の授業では、日本の英語の授業の進め方との違いはあまり感じられなかった。それでも、イギリスでは何か国語も話せるようになるのはなぜか。

どの教室にも電子黒板があり、教師が事前に作成したパワーポイントを映し出す形式で授業が進められていた。その横にホワイトボードもあるが、補助的にメモをするといった程度でしか使われておらず、日本の「板書」とは全く異なる。日本の授業では、「板書計画」「構造的な板書」などと言われ、授業の最後にその時間に学んだことが一目で分かるようにすることを大切にしている。しかし、イギリスでは、視覚資料はあまり重視されていないようであった。日本でも電子黒板が導入されつつあるが、日本の授業スタイルや子どもたちの理解に合った使い方をしていく必要がある。

印象的だったのは、Sixth form の生徒 2 名が、校内を案内しながら語ってくれた内容であった。

#### (1) 学ぶことへの責任

2 名の生徒が、「私たちは Sixth form に行くという決断をしたのだから、自分の学問に責任を持たなければいけない。」と語っていた。イギリスでは、16 歳の段階で Sixth form に行くか行かないかを決め、大きく進路が分かれる。二人とも Sixth form までは別の学校に通っていたが、大学進学を見据えてトップクラスのこの学校に入学した。「医者になるために大学に進学したい。そのために実験室が整っているこの学校を選んだ。」などと、将来の夢を明確に持って入学してきていることが分かった。

また、授業中にも関わらず、ランチルームや廊下を歩いている中学生くらいの生徒が多くいた。聞くと、週に 3 時間自習の時間があり、その時間の学びをそれぞれに委ねられているそうだった。日本では、ど

の授業を履修するか、空いた時間に何をするかを考えることは大学では当たり前だが、中学・高校の段階でこのようなカリキュラムになっていることに驚いた。学ぶことへの意識を高め、自分の学びに責任を持つための、一つのきっかけになっているのではないかと感じた。

#### (2) 多様性を受け止める雰囲気

2 名の生徒が、「ここはキリスト教の学校ではないので、色々な考え方や宗教の生徒が通っている。色々な人がいるけれど、大きなトラブルはないし、何かあっても対応してくれる先生がいるから大丈夫。」と教えてくれた。

その後、先生からは、入学したばかりの Year7 の 270 名中 90 名が特別支援を必要とする生徒（車椅子の使用・聴覚障害・学習障害・自閉症など）であることを伺った。どのような生徒を「支援が必要」と捉えるかは、日本とは異なるのだろうが、その数の多さに驚くとともに、みんな違って当たり前という空気があるように感じた。

先生の話では校内にいじめはあるが、どんな小さなことでも許さないという一貫した姿勢を学校全体で作っている、いじめなどのトラブルに対応する専門スタッフもいる。

今回話を聞くことができた生徒はトップレベルである学校の 2 名であり、それだけでイギリスの教育を語ることはできないものの、特に学びへの意識の高さについては感銘を受けた。また、様々な生徒が在籍する中で、多様性を認め合いながら学習できるように努めている様子が分かった。

## 海外学校教育実地研究を終えて

たくさんの発見ができたイギリス研修

池田 彩乃

私にとって、今回が初の海外だった。今まで海外に行くことに対し、勇気が出せなかった。しかし、新たな発見を求め、「海外に行ってみたい!」という気持ちから、海外学校教育実地研究を履修しようと考えていた。日が近づくにつれ、イギリスのことを調べていくうちに、「楽しみ…だけど…大丈夫かな」という気持ちになっていた。しかし、イギリスの研修を終えた今、「行ってよかった。イギリスにもっといたかった。」という気持ちになっている。

学校の視察については、新学期が始まった忙しい時期にもかかわらず、見学させていただき、先生方や子供たちにはとても感謝の気持ちでいっぱいである。子供たちが学校の施設の案内をしてくれた時、私に一生懸命話しかけてくれた子がいた。「何を話してくれているのだろう。」と思いながらも、ジェスチャーをつけたり、わかりやすく単語で説明してくれたりして、「なるほど!!」と、言葉の壁がありながらも分かり合えた気持ちになった。日本とイギリスの教育制度が違うため、子供は日本と違うのか…と思っていたが、無邪気な笑顔や元気さ、授業を受けるまなざしは変わらず安心した。

観光については、ロンドンの街を歩き、大好きなお店で買い物をし、憧れのアフタヌーンティー体験し、とても有意義な時間を過ごすことができた。たくさんの有名な建物がある中で、特に『ビッグベン』は、偉大なもので感動した。高いところが苦手と怖いと思いながら渡った『ロンドン橋』、渡り終わるとたくさんの赤いバスが止まっていて、バスに乗り、ロンドンらしさを感じられた。また、ダラムは自然豊かな場所であり、空気がきれいで過ごしやすい場所だった。

イギリスの文化に触れ、自分の世界に対する視野が広がった。

訪問調査から得たこと

小野 貴大

私はイギリスの授業の様子を見に行く前には、日本とどんな違うことをやっているのか、取り入れられるようなことがたくさんあるのではと思っていたが、今回授業を実際に見て、日本の授業の良さを再認識すると同時に、子どもに関する考え方や教師の仕事の様子などイギリスの学校の様子を見習いたい点もあるのではと思う点も見つけることができた。

イギリスで授業を見せて頂いた際に、イギリスは児童保護がしっかりしており、保護者が必ず迎えに来なければならないということや特別な支援が必要な子どもたちには1人に1人の支援スタッフがついているくらい手厚いなどということを知った。こういった特別な支援というところは日本ももっと充実していくべきだと思った。

また、授業を見ている時に授業形式や進め方などで日本と同じだなと思う時が多々あった。これは日本と同じというより寧ろ日本の授業の良い点なのではないかとも思った。日本では子どもたちが分かりやすいように、考えやすいようにと丁寧に行われているが、イギリスでは「はい、解いてみて」と言わんばかりに事前のお膳立てはなしで、子どもたちにやらせているように感じた。これはどちらが良くて、どちらが悪いなどということはわからないが、いい均等を取ってできたらいいのではとも感じた。

教師の働き方に関しても日本の職員室のように机がありそこで仕事をするといったものではなかったり、ただ机とソファがあってそこでお茶やお菓子を食べて、教師同士での情報交換が行えるようなスペースがあったりと随分日本と違う所も見えた。

今回海外の学校を見学できるという貴重な経験ができたので、この経験をこれからの人生に生かしていきたいと考える。

## 英国学校の指導の実際

上阪 紘也

今回、海外学校実地研修に参加し 5 つの学校を訪問させていただき、イギリスの教育制度の理解とそ  
の中で育つ子供たちの様子を実感することができた。また、日本の教育制度や学校制度との違いにつ  
いても検討することができた。日本との違いについて私は以下の 2 点について着目した。

1 点目は児童生徒の数と教員の指導体制についてである、日本では年齢が低い段階では一学級あたりの人数が少なく、年齢が高くなると人数が増えることが一般的である。指導する教員についても一学級 30 ～ 40 名に対して 1 名ということが多い。

しかし、イギリスにおいては年齢段階が上がるにつれて人数が少なくなり、より高度で専門的な内容についての指導が行われていた。指導する教員は小学校段階では基本的にティームティーチング（TT）の形が採られており児童 20 ～ 25 名に対して 2 ～ 3 名が配置されていた。

2 点目は特別な支援を要する児童生徒に対する指導の考え方である。イギリスにおいては日本で考える以上に「特別な支援を要する」の範囲が広い。例えば英語を話せないということですら「特別な支援を要する」と認められることもある。「特別な支援を要する」と認められると一定の予算がその児童生徒が通っている学校に対して与えられ、活用することができる。今回訪問した学校ではその予算を活用して対応ができる人員を配置しているというお話も多く聞くことができた。また、実際にそのような子供たちに対して指導を行っている場面にも遭遇した。このような実態を目の当たりにして私は、「特別な支援を要する」とはどういったことなのか改めて考えさせられた。今まで普通と感じていたことが普通ではなく、特別と考えていたことが特別ではないということに気づかされた。

以上 2 点については今後さらに検討し、自らの指導につなげてく。

## イギリスで感じたこと

齋藤 幸代

イギリスの学校訪問を通して感じたことは、子どもたちの学習意欲がとても高いということだ。私が訪問した学校が全て私学であったためかもしれないが、どの子どもにも話を聞いても「私たちは将来のために頑張って勉強しなければ。」「勉強するのに大切だから沢山本を読むの。」等、勉強に対して前向きな言葉を口にしていた。また、大学受験を目指す Sixth form の生徒は将来について自分で考え、行動する「大人」として見られていることも、とても印象的であった。彼らの「大人として」将来の目標に向けた大学・学部を目指して、授業を選択し、日々勉強している姿はあまり日本では見られない光景ではないだろうか。

だが、授業を参観すると、一斉授受法をベースに授業が進められている学校があったり、特別な手立てを必要とする子どもに何らかの補助が付いていた、子どもの学びのために良いものは積極的に取り入れていこうとしていたり、日本との共通点も多くあると感じた。やはり子どもの学びのためにあらゆる手段をつくそうとする教師の姿はどの国にも通じるものがあるのだと思う。

しかし、同じような教師の思いがあっても、子どもたちの姿はかなりの違いがある。この違いには国独自の教育制度や家庭環境等から来るもの、教師の発問や授業づくりから来るもの等、様々な要因が考えられると思う。その点を配慮したうえで、今後、自分の授業実践に学んだことを取り入れていきたい。

また、私は今回のイギリス研修を通して、英語が伝わる喜びを改めて感じる事ができた。学校現場で主に使用しているアメリカ英語とは違う発音や表現を聞くたびに、「相手は何と言っているのか」「どのように言えば伝わるのか」考えさせられた。だが、伝え方に苦労した分、伝わった時の喜びは大きかった。これが英語を学ぶ楽しさであり、子どもたちにも体験してほしい普段から私がまさに考えていることである。この体験と共に子どもたちへ英語を学ぶ楽しさを伝えたいと改めて感じた。



## “夢”を語る多くの学生と出会う。

佐藤 光司

今回のイギリス学校訪問では現地の学生が学校施設の説明や案内をしてくれた。話をする機会のあった学生たちは医者や経済学者などになりたいという夢を語ってくれた。そして夢のために今、勉強を頑張っているという。自分も含めて日本では自分の夢を語る学生は少ないように感じる。私はイギリスでの研修中、なぜ学生の意識にここまでの差があるのかを様々な校種の施設を巡りながら考えた。約1週間という短い期間ではあったがその背景には学生たちの充実した学びの場が保障されている学習環境が影響しているのではないかと感じた。イギリスの学校教育では早い段階から多種多様な授業から自己選択し学ぶというのが一般的である。カリキュラムを選択するという段階から受動的な学びではなく、主体的な学びが始まっているのである。このような積み重ねが、自分のキャリアプランを真剣に考え、そこに向かって進んでいくという原動力になるのではないかと考えた。

しかし、日本と英国では子どもたちを取り囲む環境が違う。日本の子供たちも多くは夢を持ち、そこに向けて努力をしている。ただ、夢を語る機会が少ないのではないか、日本の学校教育は様々なニーズを持つ子供に対応できているのかとイギリスという異国の教育を目にし、改めて考える良いきっかけとなった。

1週間という期間であったが異国の教育を学ぶことは大きな意義があると感じた。それは、異国の教育のよい所（学生の学びへの主体性）が見え、また、日本の教育のよい所（板書力や授業形態の工夫）に改めて気づくことができるからである。今回の研修での私の心残りは事前にしっかりとイギリスの教育について調べずにいってしまったところだ。イギリスの教育改革、学校システム、訪問する学校の基本事項などの土台をしっかりと把握し現地訪問を行えばより深い学び、理解になったはずである。

イギリス研修でしか味わえない経験をすることができたことに感謝し、今後に生かしていきたい。

## 自分について理解し高めること

高野 和也

今回学校見学させて頂いた学校は私たちを優しく受け入れてくれた。私が担当した学校はスライドを作成し私たちにわかりやすいように学校説明をしてくれた。その学校を見学した際案内してくれた最高学年の子どもたちがすべての質問に答えてくれた。ここまで自分の学校を説明できる学生は日本では少ないだろう。

現地の学校を訪問して感じたことは、全員が前を向いて話を聞いているスタイルは見かけることは少なかった。どのクラスをのぞいても4～5人で1テーブルを囲んでの話し合い。ホワイトボードを使用していた。学んでいることは日本の小学校と大差はなかった。しかし、グループ内・学級内での話し合い活動が多かった。クラスメイトの話を聞き自分の意見との違いを文字や言葉にしていた。自分の考えを文字にして相手に伝える活動や自分の意見を人に伝えることは日本の学生たちより多かった。この学習がこれからの日本の教育にも重要になってくるのだと感じた。

初等教育だけではなく、中等教育を受けている学生も日本の学生との差をすごく感じた。大学に進学するために通っている Sixth form の学生たちは、個人個人で学ばないことをきちんと考えている。大学で専攻する学問には対して責任をもって学習しなければいけないということも話をして聞いた。教師も Year12 以上の学生は大人として扱っているという話をして聞いた。学生の勉強に対する姿勢の違いを肌で感じ取ることができた。自分の将来についての意識の違いがはっきりと感じられた。

初等教育のうちから自分の将来について少しでも考えをもち、学習を進めることができるような指導をしていける教師になりたいとイギリス研修を通して強く思った。1週間という短い期間であったがすごく感じる場所であった。今回の研修をただの研修に終わらせるのではなく、振り返りをして自分の教師としての力に変えていきたい。

## 異なるところと似ているところ

山下 達也

今回イギリスの学校を視察して、やはり大きく違うなと感じた点も多くあったが、一方で似ているなと感じることもあったので、そのことについて述べたい。

まず、違うなと感じたことは、学校が子どもたちに何をすればよいのか、はっきりかつシンプルに分けられていることである。日本では、授業を通して学力を上げることはもちろんだが、それに加えて「人格の完成」という言葉が教育基本法第 1 条で用いられているように、心の教育も求められている。

これに対してイギリスの学校は、はっきりと学力を上げることが役割であり、心の教育は家庭の役割だと分別がなされていた。こうした役割分担が明確になされていることが、高い専門性を持った教師の授業を可能にしているのではないかと感じた。

さらに、授業を通して何を学ぶのか、ということも日本とイギリスでは違うと感じた。日本では、例えば社会科では、内容の理解が最も重きを置かれており、学習指導要領でも詳細に書かれている。これに対してイギリスは、授業を通してその内容よりも、勉強・研究・調査といった他の教科や、日常生活でも使いえる技術を学ぶことにより重きを置かれていると感じた。歴史もカリキュラムを見ると通史を扱うことはなく、実際に見た化学の授業でも、実験の成果というよりも、それによって何を学んだのかを大事にして教師が授業を行っている印象があった。

一方で似ているところもあったと私は感じている。それはこれまでの授業でやってきたこと、なぜこれを学ぶのかなどの見通しを立てているとうかがえるクラスがいくつかあったことである。日本でも授業改善の手立てとして、授業の見通しを立てることが挙げられているが、私が見学した数学の時間では、電子黒板に「What you should know…（君たちは何を知っているべきか）」「What will you learn today…（今日習うことは何か）」といったことを映し出しており、とてもわかりやすかった。これなら、日本でも使えると感じた。

## イギリス研修を終えて

木村 さとみ

海外を旅することはあっても、現地の学校を見学するという機会はなかなか得られない。今回のイギリス研修で、日本の幼稚園・小学校・中学校・高等学校に相当する色々な学校を訪問し、生の雰囲気を感じられたことは、本当に刺激的で良い経験となった。校舎の作りやカラフルな教室、のびのびと過ごせる芝生の校庭、学校に任されたカリキュラム、授業の進め方や教師と子どものやり取りなど、様々な面で日本との違いが感じられた。しかし、教師に求められる力として、第一に「子どもと対話ができること」、そして「教科（授業）への知識があること」が挙げられたことは、イギリスでも日本でも共通していることだと思う。

特に心に残ったのは、イギリスでもダラムでも生徒の将来の目標が学びのモチベーションになっていることである。「私は自分で進学することを選んだのだから、自分の学問に責任がある。」という 16 歳の生徒の言葉が印象的だった。もちろん、全ての生徒がこのような考えではないだろうし、学校によっても傾向は大きく違うだろう。しかし、何のために学ぶのか、将来自分はどのように生きていきたいか、ということを生徒自身の言葉で語ることができるのは、とても魅力的だと感じた。子ども自身が学びの主体になっているということだろう。

教師は悠然と、自分の指導に自信をもっているように感じられた。色々な家庭環境、生活様式、宗教、学習への困難さを抱えた子どもたち一人一人を大切に、温かく指導している様子が、授業や先生の話から伝わってきた。

イギリスの教育と日本の教育のどちらが優れているかということではなく、また、イギリスの良さをそのまま日本に取り入れても上手いかわからないだろう。しかし、今回肌で感じたことをきっかけに、これまで当たり前だと疑わなかったことを問い直し、今後の実践につなげていきたいと感じた。

## ICT 教育と特別支援教育の視点から

澤田 隆視

見学した高校2校では、ほとんどの教室にプロジェクターがついていたが、電子黒板はなかった。プロジェクターは黒板代わりに使われていて、教員はあらかじめ打ち込んである文書を映して使用していた。タブレット端末はある高校は、有無1校ずつだった。パソコン室のデスクトップパソコンは充実していて、プログラミング教育などが行われていた。セントピータープライマリースクールでは、幼稚園から小学校まで、全てのクラスに電子黒板が設置されていて、画面に触ったり書いたりという授業が展開されていた。iPadも32台を小学校の各学年に、3～8台割り当てられていた。

Durham Schoolでも小学校の理科室には、アンドロイドタブレットが、ラバーのカバー付きで1クラス分設置されていて、次の授業から使用すると説明があった。見た学校数が限られているが、ICTに関しては、高校よりも幼稚園や小学校が進んでいる印象を受けた。どちらの小学校でも情報専科の教員がいて、ICT教育を推進しやすい人的環境が整えられていた。

特別支援教育に関しては、St. Peter's Primary Schoolでは、どのクラスも2～3人の補助教員がいて支援にあたり、学習課題ごとに班が構成されていたり、授業の途中でも図書室に行って、補助教員の支援を受けて教室に戻れたりするようになっていた。Durham Schoolの小学校は、私立学校なので補助教員はいなかった。だがイギリスでは授業の教材は学校で教員が用意するので、忘れ物をして授業がますますわからなくなる悪循環の心配はなく、児童はそれほど困っていない様子であった。

欲を言えば、イギリスはマカトン法発祥の地でもあるので、特別支援学校も見学したかった。帝京大学教職大学院は、特別支援教育に力を入れているので、障害の重い児童生徒の教育の場を知ることができれば、さらに良かった。

違う視点や発想を知る機会になり、視野を広げることができたイギリス研修であった。

## イギリス海外研究を終えて

田部井 淳

今回の研修では、いろいろと学ぶことが多かった。第一に、ロンドン、ダラムの学校を視察することができた。イギリスでも二つの地域を観察することによりイギリスの中での教育の違いについて感じることができた。また、公立学校と私立学校の違いや公立学校でも選抜試験がある学校とない学校の違いも感じることができた。ロンドンの学校では、いろいろな人種の生徒がいた。英語に関しても母国語としての英語ももちろんあるのだが、多人種の使う英語も聞かれたので違いがあると感じた。ダラムの学校では、白人の人の割合がかなり高く。英語に関しても母国語であるので、発音などに違いが見られた。こちらへんもイギリスの教育では興味深い内容であると思う。雰囲気も違った。ロンドンでは、いろいろな人種の生徒がいたので、解放的な感じがしたが、ダラムは、白人の割合が高いので、閉鎖的であるような感じがした。

第二に、通訳の人が、学校見学時に常に帯同してくれていたのも、授業の内容、学校の事、生徒の気持ちをかなり細かいところまで聞くことができた。英語学習の意味でも通訳の人の訳し方は大変勉強になった。

第三に、寮生活である。寮生活はとても快適であった。寮での生活では、日本語が使える安心感があり、長期的な滞在では心の支えになった。また、設備もとても使いやすく整っていた。

第四に、自分自身の事として、英会話が苦手であったのだが、今回の研修のために、4月の中旬から英会話の学習を始めた。初めは全く成果が表れなかったが、毎日続けることによってだんだんと成果が表れた。今回の海外研修で、英会話の実践ができたことは大変価値のある経験であった。また、少し英会話ができると発音などの違いが把握でき、より深くイギリスについて理解を深めることができるのではないかと考えた。英語学習において、目的があると上達することも理解できたのが良かった。今後の教育活動に活かしていけると感じた。



## イギリス学校見学を通して考えること

星野 留美

Burnham Grammer School で、学校案内をしてくれた 17 歳の学生の姿がとても印象深い。スーツを身に着け、自分の学校の特色について胸を張って答えている。何を学びたいのか、将来何になりたいかを 4 人に尋ねると、それぞれが自分の考えや思いをはっきりと我々訪問者に対して語る姿があった。

日本で言えば高校生である。日本の高校生の中に、これだけ明確に自分の思いを伝えることができる生徒はどれだけいるだろうか。

Grammer School は大学進学のための準備をする学校という位置づけである。カリキュラムは、日本の高等学校より選択の幅が広く、まるで大学で学ぶような感覚を覚えた。生徒の意識は、そのようなところから育つのかかもしれない。

St.Peters Primary School で出会った 3 歳児は、日本の 3 歳児と変わらない無邪気さやあどけなさがあった。どこの国も同じだなと安心した。しかし、教師側の遊ばせ方、意思尊重の仕方、規律などは、日本の幼児教育との違いを感じた。たくさんの遊びや教材を用意し自由に選択させること、何をやるのも良いが片づけまで責任を持つこと。「いつ、何を、どうする」といった教師側の設定がないため、枠からはみ出してしまう子なんて存在しないのである。

国民性や宗教観の違いもあるだろう。しかし、一番大きな違いは目指す子ども像であり、イギリスとして求められている人間像なのではないだろうか。

イギリスの学校見学を通して、日本の良さを感じる場面も多くあった。授業中の子どもたちの姿勢、体に合った机やいすが用意されること、自分の教科書があること、どの地域に住んでいても同じ内容の教育が受けられること、板書を通して授業を組み立てる教師と思考をまとめる子ども、クラス集団と個のバランス、栄養を考えた給食…。

他国を見て、ついつい自国に批判の念を抱いてしまっていた自分に気付いた。先輩方が築いた日本の教育の強みを、どう今後の教育に生かしていくか、大きな課題を改めて感じている。